県道関係埋蔵文化財発掘調査概報

平成12年度

本村中遺跡
西久保谷遺跡
川津六反地遺跡
川津昭和遺跡
上林遺跡

2001. 3

香川県埋蔵文化財研究会

例　言

1. 本書は県道事業に伴い平成12年度に実施した本村中（ほんむらなか）遺跡・西久保谷（にしくぼたに）遺跡・川津六反地（かわつろくたんじ）遺跡・川津昭和（かわつしょうわ）遺跡・上林（かみばやし）遺跡，計５遺跡の発掘調査の概要を記録したものである。
2. 本調査は，香川県教育委員会文化行政課が調査主体となり，財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが調査担当者として実施した。
3. 本年度の財団法人香川県埋蔵文化財調査センターの調査組織は，次のとおりである。

〈総括〉

所　長　菅原　良弘
（H12.4～H12.10.31）
　小原　克己
（H12.11.1～）
次　長　川原　裕章

〈総務〉

副主幹　六車　正憲
副主幹　大西　誠治
係　長　新　一郎
主　査　長尾寿江子
主　査　山本　和代
主　査　高木　康晴

〈調査〉

参　事　長尾　重盛
主任文化財専門員　大山　真充
主任文化財専門員　藤好　史郎
文化財専門員　西村　尊文

（本村中遺跡）

主任技師　石原　徹也
技　師　小野　秀幸
調査技術員　中村　文枝

（西久保谷遺跡）

主任技師　石原　徹也
技　師　小野　秀幸
調査技術員　中村　文枝

（川津六反地・昭和遺跡）

文化財専門員　蔵本　晋司
文化財専門員　増井　泰弘
調査技術員　豊岡　多恵　　調査技術員　秋山　亮

（上林遺跡）

文化財専門員　蓮本　和博
文化財専門員　山下　平重
主任技師　石原　徹也
技　師　長井　博志
技　師　松岡　晶
技　師　小野　秀幸
調査技術員　中山　尚子
調査技術員　中村　文枝
調査技術員　豊岡　多恵

4. 調査に際しては次の機関に協力を得た。記して謝意を表したい。（順不同敬称略）
香川県土木部道路建設課，香川県観音寺土木事務所，香川県坂出土木事務所，香川県高松土木事務所
地元各自治会，地元各水利組合
5. 本書で使用した遺構略号は，次のとおりである。
ＳＡ：柵列　ＳＢ：掘立柱建物　ＳＤ：溝状遺構　ＳＥ：井戸　ＳＨ：竪穴住居跡
ＳＫ：土坑　ＳＰ：ピット　ＳＲ：自然流路　ＳＸ：性格不明遺構
6. 本書で用いている方向の北は国土座標第Ⅳ系の北である。
7. 本書の執筆は，調査担当職員が分担して行い，執筆者名は目次に記した。挿図の作成・浄書については調査各担当職員が行った。なお，編集は小野が行った。

本文目次

Ⅰ．調査の経緯と経過 …… (藤好) 1

Ⅱ．本村中遺跡
1．立地と環境 …… (小野) 2
2．調査の概要 …… (小野) 2
3．まとめ …… (小野) 6

Ⅲ．西久保谷遺跡
1．立地と環境 …… (石原) 9
2．調査の概要 …… (小野) 10
3．まとめ …… (小野) 13

Ⅳ．川津六反地・川津昭和遺跡
1．立地と環境…… (蔵本) 17
2．川津六反地遺跡の調査…… (蔵本) 20
3．川津昭和遺跡の調査…… (蔵本) 31
4．まとめ…… (蔵本) 35

Ⅴ．上林遺跡
1．立地と環境…… (蓮本) 37
2．調査の成果…… (長井・小野) 37
3．まとめ…… (長井・小野) 45

挿図目次

第１図　遺跡の立地……２
第２図　楕円文施文土器拓影……２
第３図　菱形文・燃糸文・山形文・押引文施文土器拓影……３
第４図　縄文包含層出土石器実測図……３
第５図　ＳＸ04平・断面図……４
第６図　ＳＤ07断面図・出土遺物実測図……４
第７図　ＳＤ04・ＳＤ02断面図・出土遺物実測図……５
第８図　ＳＴ01平・断面図……６
第９図　本村中遺跡遺構平面図……７・８
第10図　中世遺構変遷図……７・８
第11図　遺跡の立地と分布……９
第12図　石器出土分布図……10
第13図　出土石器実測図……10
第14図　ＳＨ02平・断面図及び出土遺物実測図……11
第15図　ＳＤ01断面図・出土遺物実測図……12
第16図　ＳＤ02断面図……12
第17図　ＳＢ01平・断面図・出土遺物実測図……13
第18図　西久保谷遺跡遺構平面図・調査区旧状丈量図　…15・16
第19図　周辺遺跡分布図……18
第20図　川津六反地遺跡遺構平面図・調査区位置・条里型地割想定図　……21・22
第21図　川津昭和遺跡遺構平面図・土層柱状図　……23・24
第22図　出土石器分布図……25
第23図　川津六反地遺跡出土遺物実測図１……26
第24図　川津六反地遺跡出土遺物実測図２……27
第25図　サヌカイト集積遺構平・断面図……28
第26図　川津六反地遺跡出土遺物実測図３……31
第27図　ＳＤ01土層断面図……32
第28図　川津昭和遺跡出土遺物実測図……33
第29図　遺跡位置図……37
第30図　Ａ区ＳＢ01平・断面図……38
第31図　Ｂ区ＳＲ01及びＳＤ群平面図……40
第32図　Ｂ区出土土器実測図……40
第33図　Ｂ区ＳＲ01及びＳＤ群土層断面図……41
第34図　遺構配置図……43・44
第35図　調査区割図……43・44

写真目次

写真１　ＳＤ07検出状況……４
写真２　ＳＸ04検出状況……４
写真３　溜池状遺構検出状況……５
写真４　ＳＤ03・04土層……５
写真５　ＳＤ02遺物出土状況……５
写真６　ＳＴ01検出状況……６
写真７　石器検出状況……10
写真８　ＳＨ02検出状況……11
写真９　ＳＤ01遺物出土状況……11
写真10　ＳＢ01検出状況……12
写真11　Ｂ区第１遺構面全景……39
写真12　Ｂ区ＳＲ01及びＳＤ群全景……39
写真13　Ｂ区ＳＲ01土器出土状況……39
写真14　ＳＤ16ｂ取水口杭列検出状況……39
写真15　ＳＤ16ｂ取水口杭列断ち割り状況……39
写真16　Ｃ区全景……42
写真17　Ｅ区全景……42
写真18　Ｆ区全景……42

表 目 次

第１表　平成12年度県道他・河川関係発掘調査一覧……１

Ⅰ．調査の経緯と経過

1．発掘調査

平成12年度の県道（県管理国道を含む）工事に伴う埋蔵文化財発掘調査は，香川県教育委員会と財団法人香川県埋蔵文化財調査センターとの間で平成12年４月１日付けで締結した「埋蔵文化財調査契約」に基づき実施した。当初予定では，県道紫雲出山線詫間町本村中道跡，県道丸亀詫間豊浜線三野町西久保谷遺跡，国道438号坂出市川津六反地遺跡・川津昭和遺跡，中徳三谷高松線高松市上林遺跡，地域高規格道路高松市岡本地区の合計13,991㎡の発掘調査を実施する予定であったが，用地取得等の遅れから高規格道路高松市岡本地区の調査が県道中徳三谷線上林遺跡の追加調査へ変更となり，14,510㎡の発掘調査をセンター直営方式で実施した。

本村中遺跡は，昨年度調査区の西側に隣接する調査区で縄文時代早期の遺物包含層と弥生時代後期の溝および中世後半代の溝が出土している。中世後半の溝は調査区内の池状の落ち込みから延びるもので湧水を利用した灌漑施設の可能性が考えられるものである。

西久保谷遺跡では古墳時代後期の竪穴住居と奈良時代の掘立柱建物を検出し，土錘・蛸壺などの漁労具とともに製塩土器が出土している。調査対象地の北東側に広がる砂州上で製塩が行われたものであろう。三野郡からの調塩木簡もあり注目される。

川津六反地遺跡では，縄文時代の石器製作ブロックと共にサヌカイト素材剥片の集中箇所を検出している。ブロックからは石鏃の未製品が含まれるほか非常に小片のチップが大半であり，素材剥片からの石鏃等の小型の石器を製作したブロックで，隣接する素材剥片の集積箇所と同時期のものと考えられる。サヌカイト原産地の金山の南側谷筋が丸亀平野に出た位置に本遺跡が立地することや，土器等の遺物の出土がないことなど本遺跡が集落域に近接していないと考えられる。一連の石器製作の典型的パターンを示すものとして注目される。川津昭和遺跡では，弥生時代後期の基幹水路を検出した。近くの下川津遺跡等で検出した基幹水路とほぼ同時期・同規模のものであり，平野内に何条も水路が巡らされていることが判明し注目される。

上林遺跡は，弥生時代から中世にかけての集落域が展開する空港跡地遺跡の南に位置し，弥生時代後期の直線的な用水路と考えられる東西方向の溝や掘立柱建物を検出している。弥生時代の地域開発に関する基礎的な資料を得ることができた。

2．整理作業

今年度実施した報告書作成作業は，平成11年度に発掘調査を実施した国道193号岡清水遺跡を対象として行った。

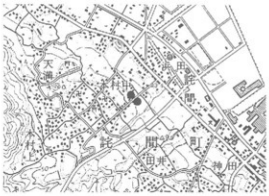
番号	路線名等	遺跡名	所在地	調査平面積(㎡)	調査期間	遺　構	遺物	調査担当
1	紫雲出山線	本村中	三豊郡詫間町本村中	1,319	H12.8-H12.10	縄文時代早期土器，弥生時代後期溝	土器，石器	小野・石脇・中村
2	丸亀詫間豊浜線	西久保谷	三豊郡三野町西久保谷	2,400	H12.4-H12.7	古墳時代竪穴住居，奈良時代溝・掘立柱建物	土器，漁具	小野・石原・中村
3	国道438号	川津六反地・川津昭和	坂出市川津町	3,025	H12.9-H13.1	縄文時代石器製作跡・弥生時代後期溝(農業用水)，条里溝	石器，土器	藁本・増井・豊岡・秋山
4	中徳三谷高松線	上林	高松市上林町	7,766	H12.9-H13.3	弥生時代掘立柱建物，溝，中世条里溝	土器，木器	長井・渡本・中山・小野・石原・豊岡・山下・松岡・中村
		小　計		14,510				

表１　平成12年度県道他・河川関係発掘調査一覧

Ⅱ．本村中遺跡

1．立地と環境

本村中遺跡は，荘内半島の付け根にある妙見山東麓，標高約10mの緩傾斜面上に立地する。県道紫雲出山線建設に伴い，平成11・12年の２ヵ年にわたり調査を行った。詳細は平成11年度県道概要報告を参照されたい。



第Ⅰ図　遺跡の立地（Ⅰ／25,000）

2．調査の概要

調査対象地は，三豊郡詫間町大字詫間本村中3412外を中心に行った。調査面積は1,319㎡，一部遺構面が２面存在したことから実掘面積1,719㎡である。調査区は昨年度設定の調査区を踏襲し，県道を境に西側をⅠ区・東側をⅡ区と称して調査を行った。調査地の地目は全て水田である。

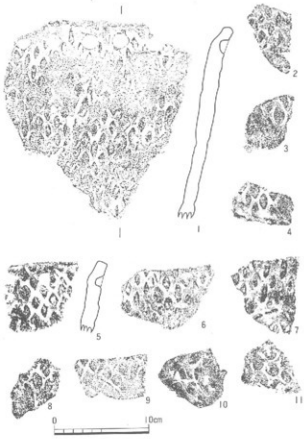
地形的には，本遺跡は巨視的にみると，西側にある妙見山から延びてくる丘陵上に位置する。微視的にみると，これらの丘陵も，妙見山から流れてくる土砂が形成する扇状地をベースとしているようである。この扇状地を耕作地としているため，周辺の水田は等高線に平行するようにつくられており，Ⅰ区北西隅は水田面が２面に分かれ，その比高差は約0.8mを測る。これらの耕作に関わる地形の改変は著しく，旧地形の復元がやや困難な状況であった。

縄文時代

Ⅰ区西半分を中心とした範囲で，縄文時代早期の遺物を大量に含む包含層を検出した。包含層は２層に分かれており，上層は茶褐色混粗砂粘性極細砂・下層は灰黄色混祖砂粘性極細砂からなる。出土したのは約600点の土器片と，大量の石器である。当該期の遺構については，検出できなかった。遺物が散漫に出土している状況から見て，西側の高くなっている部分から流れ落ちてきたものと想定できる。

上層から出土したものに対する施文は，楕円文・菱形文・撚糸文・山形文・押引文・半裁竹管文による波状文などが認められる。完形になるものや底部が認められず，器形の詳細は不明であるが，深鉢が主体になると想定できる。

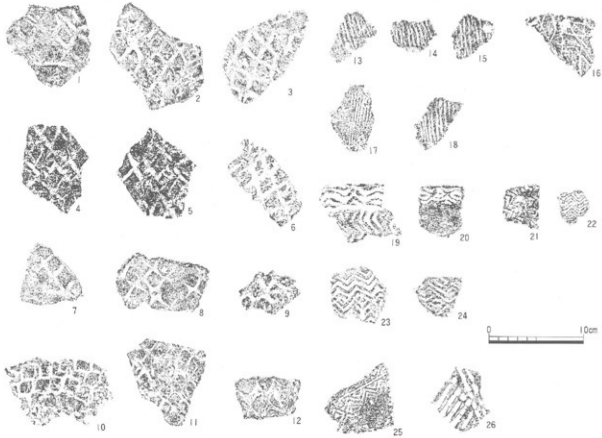
一方，下層から出土したものに対する施文は，大型・小型の楕円形あるいは菱形の押型文，および撚糸文が認められる。ある程度まで器形が復元



第２図　楕円文施文土器拓影（Ⅰ／４）

可能なものが若干認められるほか，底部の破片も出土しており，主体となる器形は尖底深鉢であると想定できる。完形になるものは認められない。最大の破片で約20cm角を測る（第２図－１）。また，口縁部及び底部が若干出土している。これらの土器は，早期後半の押型文土器終末期に属すると想定している。

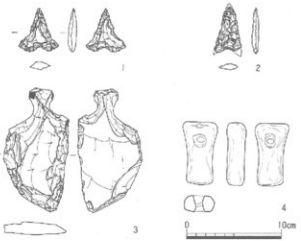
石器については上層・下層両方から比較的大量に出土している。出土器種は石鏃（第４図－１・２）



第３図　菱形文・撚糸文・山形文・押引文施文土器拓影（１／４）

スクレイパー・石匙（第４図－３）・楔形石器などの定型石器のほか，剥片・砕片・石核が認められる。また，敲石・磨石などといった礫石器も若干出土している。使用石材はサヌカイトが主体となる。礫石器は砂岩の使用率が高い。石鏃の中には赤色（第４図－２）・青灰色チャート製のものが１点ずつ確認できているほか，中世段階の遺構埋土中から姫島産黒曜石と想定される灰白色の石材を使用したものも１点確認している。これらの石材は本県で産しないものであることから，当該地域との交流が想定できる好例となろう。

また，特筆すべき点として，下層埋土中から有孔石製品（第４図－４）が１点出土している。結晶片岩製で琴柱状の平面形を呈し，上端中央付近に表裏両面からの穿孔が認められる。この穴の上端には若干摩滅痕が認められることから，垂飾と



第４図　縄文包含層出土石器実測図（１／２）

して用いられていた可能性が想定できる。

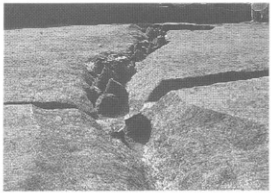


写真１　ＳＤ07検出状況（東から）

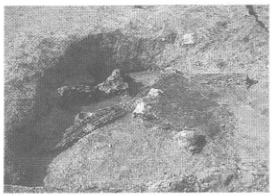


写真２　ＳＸ04検出状況（南東から）

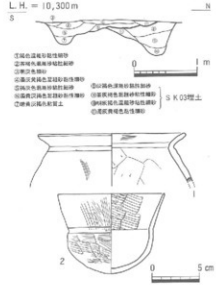
弥生時代

Ⅱ区東側第２面において当該期の遺構が認められる。内訳は，自然流路２本と溝状遺構１条および性格不明遺構２基である。ここでは溝状遺構１条と性格不明遺構１基について触れる。

ＳＸ04　調査区東端北よりで検出した不定形の遺構である。全体を検出していないため，詳細は不明であるが，３ｍ四方程度の規模であると想定している。断面形状は箱型で，底部に灰色細砂，その上層に黒褐色粘質土が堆積していた。上層の黒褐色粘質土中には灰色粗砂・細砂がラミナ状に混入していた。底部から甕２点・鉢１点が出土している他，板状を呈する木が出土している。出土遺物から，弥生時代終末期に属するものと想定できる。

ＳＤ07　Ⅱ区中央やや東よりで検出した，東西方向に伸びる溝状遺構である。検出長は約13m，幅1.5m，深さ0.6mを測る。断面形状は底部が若干くぼむ浅い皿状を呈する。底部に茶灰色粗砂・上層に黒褐色粘質土が堆積している。主として上層埋土から，甕・鉢を中心とした土器が大量に出土している。出土遺物から弥生時代終末期に属すると想定できる。

第５図　ＳＸ04平・断面図（１／60）



第６図　ＳＤ07断面図（１／60）
・出土遺物実測図（１／４）

中　　世

土坑墓１基・溝状遺構８条・溜池状遺構１基・ピットを検出した。

溜池状遺構　Ⅰ区中央やや南より付近で検出した遺構である。大半が調査区外へ伸びることと，後世の著しい削平のため，詳細は不明である。底部を巡る大型の石列を検出している。溜池状遺構の護岸であ

ると想定している。

ＳＤ04　Ｉ区中央付近で検出した溝状遺構である。南西方向から北東方向に伸びる。主軸方位はN53°Ｅを測る。幅約２ｍ，深さ約0.3ｍを測る。断面形状は浅い皿状を呈する。ＳＤ03同様，溜池状遺構の護岸により堰き止められるような状況を呈しているが，ＳＤ03と比較すると護岸のレベルが低いことと，ＳＤ03との間に石列が認められるため，ＳＤ04が溜池状遺構からの導水路であったことが想定できる。出土遺物から概ね15世紀後半頃に掘削され，最終埋没が16世紀頃のものと想定できる。

ＳＤ02　Ｉ区中央付近で検出した溝状遺構である。南東方向から北西方向に伸びてきて，調査区西端付近で北流する。幅約２ｍ，深さ約0.5ｍを測る。断面形状はゆるいＵ字を呈する。溜池状遺構の石列を切っていることから，ＳＤ04・溜池状遺構より後出するものと想定できる。出土遺物から概ね16世紀頃の所属であると想定できる。

ＳＴ01　Ｉ区西端で検出した土坑墓である。平面形は縦に長い台形で，北側にやや開く形状を呈する。規模は，長軸1.8ｍ・短軸0.7ｍを測る。上面がかなり削平されており，深さは約２cm程度遺存しているに過ぎない。土坑中央底部からは人骨を検出している。削平を受けているため遺存状況が劣悪で，右半身の一部と想定できる部位が辛うじて遺存していた。埋葬方法は屈葬で，西に向けて側臥させている。頭位は北である。副葬品の存在は確認できなかった。所属時期は副葬品が遺存しないため不明であるが，埋土から概ね中世から近世にかけての遺構であると想定できる。

写真３　溜池状遺構検出状況（東から）

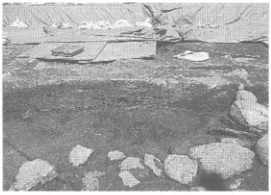


写真４　ＳＤ03・04土層（南西から）

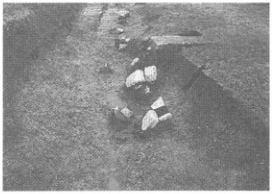
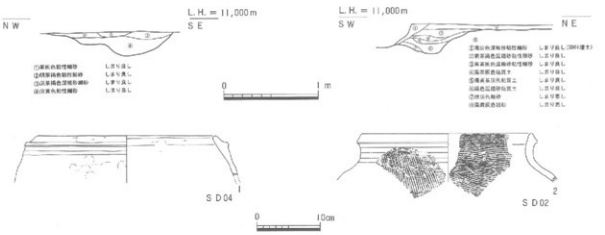
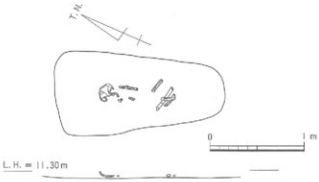


写真５　ＳＤ02遺物出土状況（南東から）



第７図　ＳＤ04・ＳＤ02断面図（１／60）・出土遺物実測図（１／６）



第8図　ＳＴ01平・断面図（1／60）

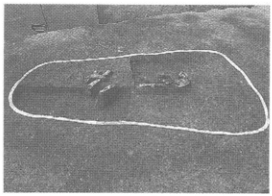


写真6　ＳＴ01検出状況（北西から）

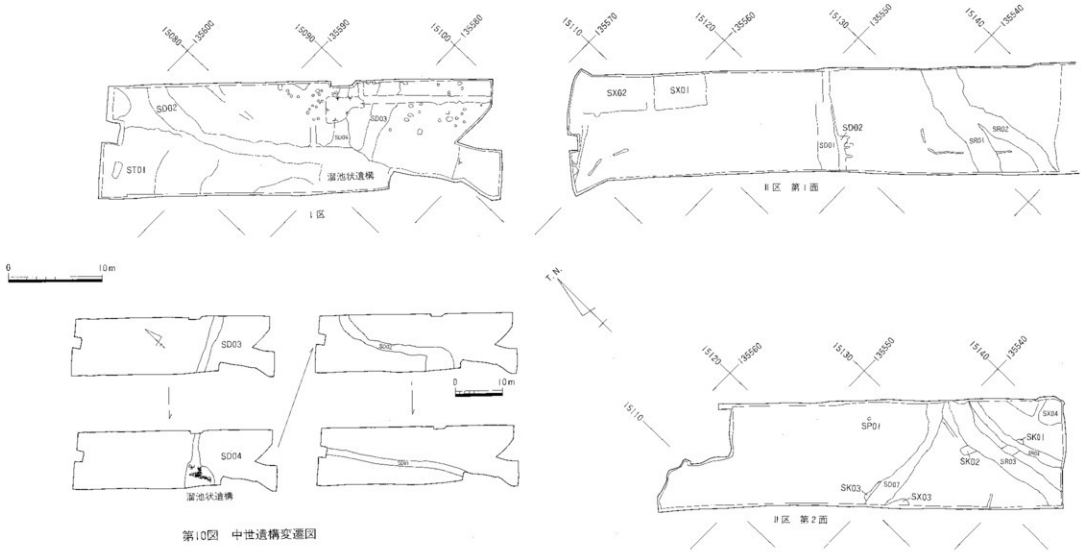
3. ま と め

今回の調査により，縄文時代早期から近世までの遺構・遺物が存在していることが判明した。

縄文時代早期については押型文を施文した土器片が出土している。これらには，事実記載のところでは触れていないが，無文厚手の土器片が共伴している。破片資料が中心であることから，器形など詳細が不明な点の多いことが悔やまれる。上記の土器は，押型文期後半から終末に位置付けられる高山寺式土器および穂谷式土器であると想定している。出土状況から上層・下層がそれぞれ土器型式に対応するものと想定できる。さて，既往の調査により判明している縄文時代早期のまとまった資料は，仁尾町小蔦島所在の小蔦島貝塚で黄島式並行の遺物が出土している程度である。したがって，今回の成果により，それに後続する時期のまとまった資料を得ることができたものといえる。また，これまで不明であった香川県における当該期資料の実態を解明する上で大きな役割を果たすであろう。さらに，出土した石器石材に県外産のものが存在することから，これらの地域との関連性を検討する必要がある。今後，以上の観点で資料整理を行うことによって，より詳細な実態が判明するものと考えられる。

弥生時代後期から終末にかけての資料については，良好な一括資料になるものと想定でき，この地域における当該期の様相を知る手掛りとなることが想定できる。

中世から近世については，先述したとおりの遺構が見つかっているが，遺構の変遷過程を見ると，ＳＤ03・溜池状遺構およびＳＤ04・ＳＤ02という変遷を追うことが出来る（第10図）。遺跡周辺には明確な条里型地割を認めることが出来ず，周辺地形に規制された独特の土地開発の方法が想定できよう。したがって，これらの遺構は本遺跡並びに周辺の水利に関わる土地開発の一連の流れを想定することが出来る好例となるものと想定できる。



第10図　中世遺構変遷図

第9図　本村中遺跡遺構平面図

Ⅲ. 西久保谷遺跡

1. 立地と環境

西久保谷遺跡は三豊郡三野町大字大見に所在する。遺跡南側に位置する貴峰山(標高222.8m)，毘沙古山(標高231m)の山裾部にあたり，緩やかな海岸段丘上，標高約12mに立地する。遺跡から北約100mには瀬戸内海が広がり，津島をほぼ正面にのぞむ。

「三野町史」によると，大見地区は他地区に比べて古墳が多く，同町内でも開発の早い地域であったと推考されている。本遺跡周辺の代表的な遺跡としては新開古墳(円墳)，広形銅剣の出土した弥谷山遺跡，深尾東方古墳群，箱式石棺の出土した東山西南古墳などが挙げられる。

また同町には多くの窯跡が存在する。本遺跡から南東に約2km離れた火上山の山麓一帯には三野古窯跡群があり，7世紀代に操業し，須恵器を焼いていたと考えられている。また南に約2.5kmには宗吉瓦窯跡がある。現在までに23基の窯が確認されており，出土した瓦の一部は藤原宮に供給されたと考えられている。

1. 西久保谷遺跡
2. 新開古墳
3. 弥谷山遺跡
4. 深尾東方古墳群
5. 東山西南古墳
6. 三野古窯跡群
   - a. 道免1号窯跡
   - b. 道免2号窯跡
   - c. 大平窯跡
   - d. 手石場窯跡
   - e. 男谷窯跡
   - f. 原上窯跡
   - g. 野田池東岸・北岸窯跡
7. 宗吉瓦窯跡

第11図 遺跡の立地と分布（1／25,000）

2. 調査の概要

調査対象地は，三野町大見甲6905番地外を中心に面積2,400㎡を対象とした。調査区の設定は町道を境に，西側をⅠ区・東側をⅡ区として調査を実施した。調査地の地目は全て水田である。

地形的には本遺跡は，低丘陵の尾根上に位置する。現状では，この尾根上は平坦化が進んでいるが，これは昭和58年に遺跡周辺が大規模な区画整備事業により，著しく旧状を変更されたためである。現状でやや低い位置にあるⅠ区では，南半分が著しく削平を受けており，この部分においては遺構がほとんど検出できなかった。一方，Ⅱ区は著しく客土されており，遺構面まで約1.8mほどの厚さで客土層が存在した。この状況下で，Ⅰ区では古墳時代後期～奈良時代の溝・ピット群を，Ⅱ区では縄文時代～近代までの遺構をそれぞれ検出した。今回は縄文時代～奈良時代について触れる。

縄文時代

調査区内の遺構埋土を中心に石鏃・石匙などのサヌカイト製石器が出土している。また，Ⅱ区の西端地山層中においては東西２ｍ×南北３ｍの範囲で不定形ないし横長を呈するサヌカイト製剥片を中心に約40点からなる石器群を検出した。定型石器の出土は認められず，剥片・砕片・石核が出土している。４点二組の接合資料が認められることから，剥片剥離作業の場が存在したと考えられる。土器が１点共伴しているが，転磨が著しく，時期を特定する要素として用い得ない。石器は大半が比較的風化の進んだものである。剥片には明瞭な打面をもつものが少なく，背面には上下両端からの剥離面が認められるものが多いことから残核の形状はクサビ形を呈していたものが多かったと想定できる。

所属時期は比較的同様の剥片を多用することが多い縄文期のものと想定している。

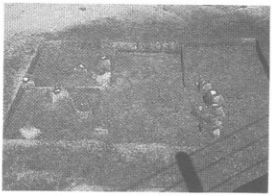
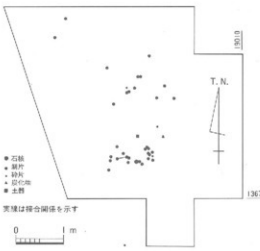
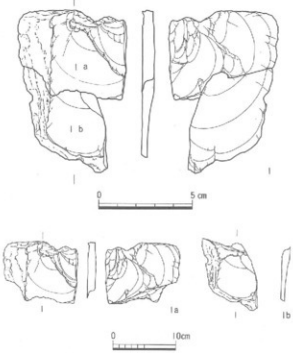


写真７　石器検出状況（西から）



第12図　石器出土分布図（１／80）



第13図　出土石器実測図（上段１／２　下段１／１）

古墳時代

ＳＨ02　Ⅰ区北西隅で検出した竪穴住居跡である。住居跡の約３／４が調査区外へ伸びるほか，調査区西側にある谷によって著しく削平を受けており，その規模についての詳細は不明である。現存する規模は３ｍ×１ｍである。主軸方位はＮ41°Ｗを測る。主柱穴の位置は不明である。平面図には図化し切れていないが，南東隅の壁際で側溝が巡ることを確認している。

さて，この竪穴住居跡の床面からは，ほとんど遺物の出土は認められず，わずかに須恵器坏身・土師器甕，製塩土器の細片を検出できたにとどまる。また，図化し得なかったがガラス製小玉１点のほか，滑石製紡錘車が１点出土している。滑石製紡錘車の出土位置は平・断面図にドットで印しているとおりである。所属時期は，出土した須恵器（第14図）から６世紀後葉であると想定できる。

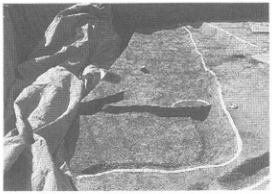
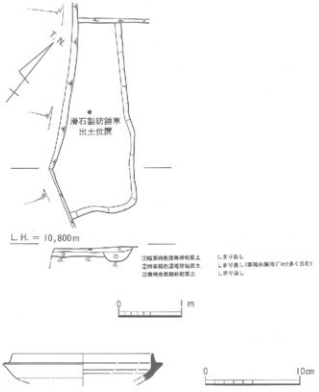


写真８　ＳＨ02検出状況（南から）



第14図　ＳＨ02平・断面図（Ⅰ／60）
及び出土遺物実測図（Ⅰ／４）

古　　代

ＳＤ01　Ⅰ・Ⅱ区にまたがって検出した溝状遺構である。Ⅰ区西側中央付近に端を発し，南西から北東へ直流し，Ⅱ区中央北寄りのあたりでくの字に折れ，調査区北側へと抜ける。幅約２ｍ，深さ約0.4mを測る。溝の北岸が掘りくぼまり，南岸は総じて浅い。土層断面の観察によると，北岸の深く掘りくぼまった部分は，黄褐色粘質土の地山ブロックが多く混入しており，人為的な埋め戻し行為が想定できる。この部分からはほとんど遺物の出土は認められず，わずかに６世紀後半段階のものと考えられる須恵器片が検出できたにとどまる。この溝の上層と，くの字に折れて北流をはじめたあたりに堆積していた埋土の中からは，７世紀後半段階から８世紀後半段階までの遺物が大量に出土している。特に，Ⅰ区で検出した部分とⅡ区の東西方向に走る部分で遺物の堆積が顕著であった。この溝からは須恵器坏身（第15図―３・４）・

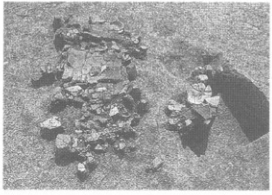
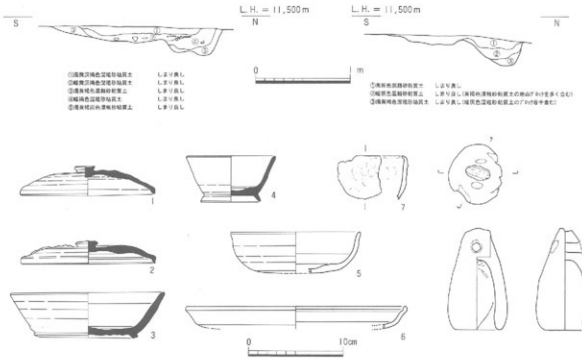


写真９　ＳＤ01遺物出土状況（北から）



第15図　ＳＤ01断面図（１／60）・出土遺物実測図（１／４）

坏蓋（第15図―１・２），無蓋高坏，土師器坏（第15図―５）・皿（第15図―６）のほか，蛸壺（第15図―８）・管状土錘・棒状土錘といった漁撈具や大量の製塩土器片が出土している。製塩土器片は溝埋土内から大量に見つかったものの，完形になるものは全く認められず，わずかに口縁部が完形近くに復元できるものが認められる程度である（第15図―７）。どの細片も非常に薄く作られていることが特徴として挙げられる。また，内外面共に指頭痕が顕著に認められるが，布目・タタキ目などの調整痕は認められない。

なお，上記の遺物のほかに，握り拳大の花崗岩・砂岩を中心とした焼け礫が若干認められた。

ＳＤ02　これもⅠ・Ⅱ区にまたがって検出した溝状遺構である。いたるところで後世の削平を受けているため，詳細は不明であるが，概ね南西方向から北東方向へ一直線に伸びる溝状遺構として捉えることができる。幅0.5m・深さ0.1mを測る。主軸方位はN53°Eを測る。中央部分と比較して，西端でレベルが下がる。遺物の出土はほとんど認められなかったが，ＳＢ01と主軸方位が揃うことから，概ね同時期の７世紀後半段階に属する遺構と想定できる。

第16図　ＳＤ02断面図（１／20）

ＳＢ01　Ⅰ区北側中央付近で検出した２間×２間の規模をもつ掘立柱建物である。南北４m，東西3.5mのやや南北に長い建物が想定できる。柱穴の規模は，約60cm四方の隅丸方形を呈し，深さは約40cm程度遺存していた。柱根は遺存していなかった。建物の主軸方位はN37°Wを

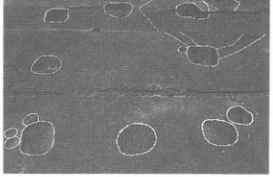
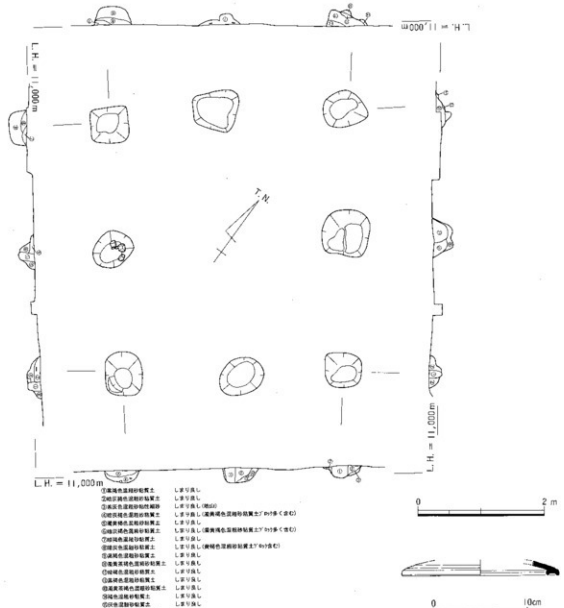


写真10　ＳＢ01検出状況（南東から）

測る。総柱建物の可能性を考え，想定される中央部分にトレンチを開けて最終確認をしたが，柱穴の存在は確認出来ていない。さて，柱穴埋土からは少量ながら須恵器・土師器の細片や，棒状土錘片・製塩土器片が出土している。この建物の所属時期は，柱穴埋土内出土の土器（第17図）から，７世紀後半段階に属するものと想定できる。



第17図　ＳＢ01平・断面図（１／60）・出土遺物実測図（１／４）

3．ま と め

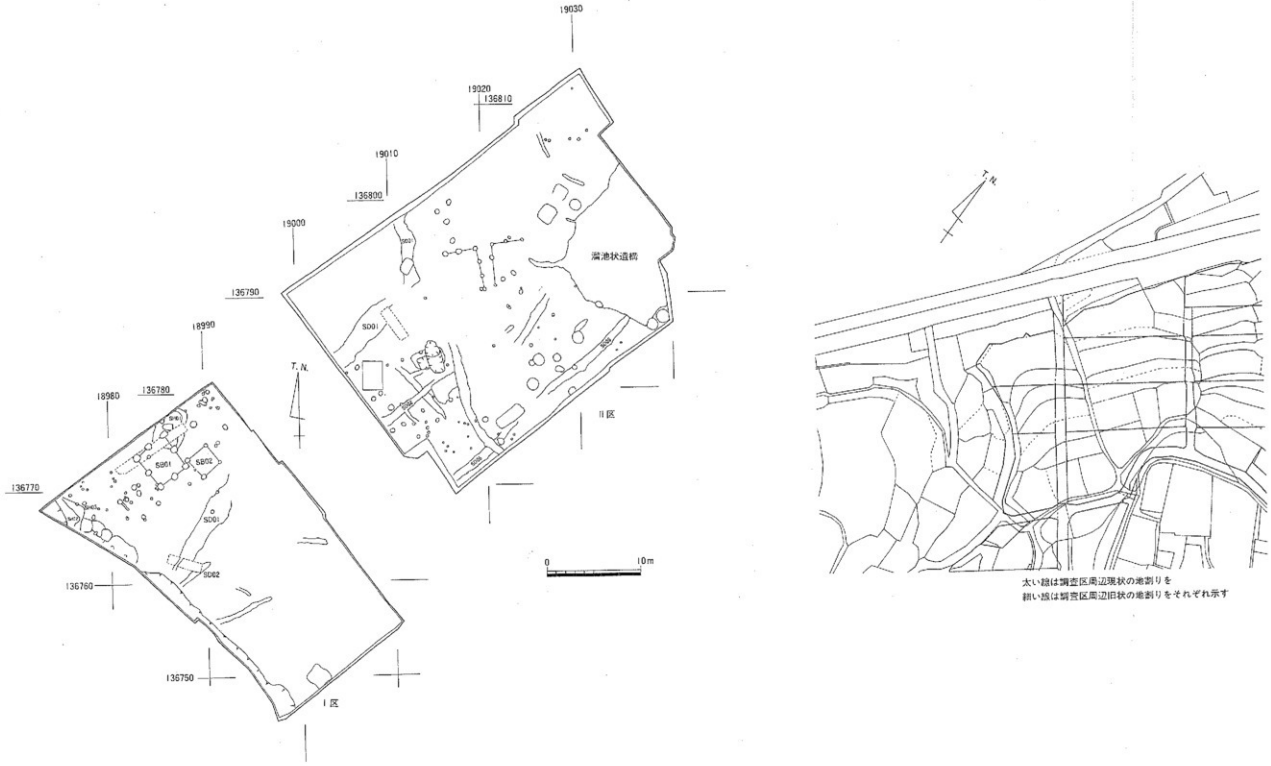
今回の調査により，この遺跡は縄文時代から近世にかけての複合遺跡であることが判明した。中でも，古代においては製塩を営む集落が構成されていたことを想定できる，良好な遺跡である。現段階で想定できる遺跡の評価を若干，ここでまとめたい。

まず，縄文時代についてであるが，古墳時代以降の基盤層となる黄褐色粘質土中に遺物が包含されていることを確認できたことにより，当該期の遺構・遺物が周辺に存在することが想定できる。石器集中

箇所以外にも，遺構内からサヌカイト製石器が出土した際には，周辺の基盤層の掘り下げを行ったが，調査区内では明確なまとまりを確認することが出来なかった。今後，遺跡周辺の調査事例の増加を待ちたい。

古墳時代についても，後期のものと想定できる竪穴住居跡を検出したことにより，集落の存在が想定できる。特に，Ⅰ区西側の谷に面した部分については，遺構のあり方から，本来，平坦面がさらに西に伸びていたことが想定できる。竪穴住居跡は今回記載した他にも，所属時期は不明ながら，２棟確認している。本遺跡が立地する丘陵南側には古墳が確認されており，これとの関係を今後検討してゆく必要がある。

古代については，先に述べたとおり，出土遺物から製塩と漁撈を生産主体とする集落の存在が想定できる。遺構の遺存状況が不良で，集落の規模・製塩関連の施設などについて，詳細は不明である。当遺跡が立地する丘陵の裾部に若干平坦地が認められ，眼前に海岸線が広がることから，この丘陵裾部の海岸付近を中心に製塩炉などの遺構が広がっていたことも想定できよう。ところで，平城京左京三条二坊二条大溝濠から出土した木簡に「讃岐国三野郡阿麻郷戸主佐伯直赤猪調塩三□斗」の記載が認められるものがある。この「阿麻郷」の遺称地が不明であるため，詳細な場所は不明であるものの，当遺跡が三野郡内に位置することを考えると，何らかの関連があることも想定できる。ただ，南海道とは山を一つ隔てていることから，三野郡の中心域からも隔絶されていた可能性が否定しきれず，今後，周辺での調査が行われることに期待したい。



第18図　西久保谷遺跡遺構平面図・調査区旧状丈量図（1/400・1/1,500）

Ⅳ．川津六反地・川津昭和遺跡

1．立地と環境

地理的環境

香川県の中央部に位置する丸亀平野は，東西約13km，南北約10kmに広がる扇状地性の海岸平野で，東より大束川，土器川，弘田川などの中小河川が瀬戸内海に流入する。川津六反地遺跡・川津昭和遺跡は，その丸亀平野北東隅，大束川下流右岸部に位置し，東から南を常山や城山より派生する低丘陵部に，西を大束川に，北を角山に画された，南北３km，東西1.5km程の楔状を呈する平野部のほぼ中央部に立地する。なお，遺跡周辺の現地表面の標高は8.5m前後である。

大束川下流域両岸には，その流路方向に平行して，比高１m前後の崖面が連続し，明確な河岸段丘地形を呈する。この段丘地形の形成時期は，川津一ノ又遺跡や下川津遺跡の出土遺物の検討から，古代末頃の可能性が高く，瀬戸内海東部の臨海平野で指摘された「完新世段丘」に相当することが想定（木下1995）されている。この段丘崖で画された大束川流域の低い地形面を「氾濫原面」，段丘崖上位の地形面を「段丘Ⅰ面」と呼称し，本遺跡はこの段丘Ⅰ面に展開する。

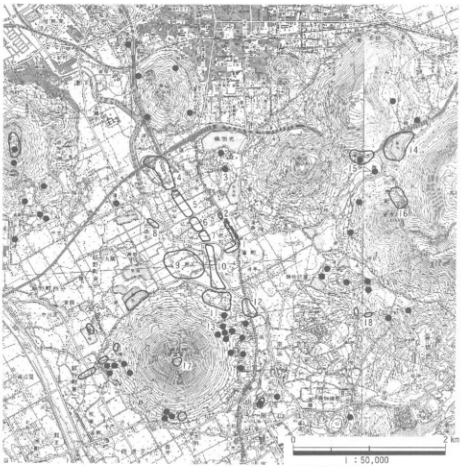
さて，こうした段丘崖の形成は，本地域の灌漑システムに大きな制約や変更を生じさせたと想像される。現状では，周囲の水田面から約７～８m下方を流下する大束川より直接取水し，域内の用水として利用することは至極困難であり，段丘崖形成時に遡ってもその状況は大きくは違わないであろう。本地域を含めた大束川右岸下流域の灌漑は，より上流の皿組セキ（川津町井手の上）より取水する皿組用水と，大束川支流の城山川上流より取水する用水の２系統の用水網にみられる広域的な灌漑システムに大きく依存している。つまり，地域内における農業生産は，自集団内の努力のみでは必ずしも機能しえない状況にある。こうした広域的灌漑システムの成立がいつの時期に遡るのかは今後の課題だが，今回の調査によって確認された水路群の変遷，とりわけ昭和遺跡ＳＤ03の廃絶が，段丘崖の形成時期との関わりにおいて一定の示唆を与えるものだと考える。

歴史的環境

旧石器時代の遺跡は，城山や飯野山裾部の低丘陵部を中心に分布している。しかし，採集資料や二次的な堆積状況を示すものが大半である。川津一ノ又遺跡で，弥生時代の流路等より翼状剥片や縦長剥片石核が出土しており，また川津東山田遺跡からも若干量の石器が出土している。

縄文時代には，後・晩期の遺物が下川津・川津下樋・川津一ノ又・川津川西遺跡等において出土している。いずれも流路内や包含層，あるいは明らかに後出する時期の遺構埋土に混入しての出土であり，明確な居住遺構には恵まれていない。

低地部への集落の進出は，続く弥生時代になると顕在化する。下川津遺跡では前期初頭頃の竪穴住居１棟が確認されており，県下最古期の住居遺構となる。また，川津下樋遺跡では，やや後出する時期の旧流路内に面積10㎡前後の小区画水田が経営され，またそれに導水した可能性のある井堰も確認されるなど，定型化した灌漑技術が極めて早い段階に当地域へもたらされていたことを実証した。一方，西又遺跡では幅２～３m，深さ1.2m程の大型水路が検出され，環濠の可能性も指摘されている。しかし，それら集落にしてもせいぜい中期前半頃までには廃絶・衰退しており，弥生時代を通じて安定した拠点集落が経営されていた証左に乏しい。こうした弥生中期前葉頃における集落遺跡の衰退の要因については，



第19図　周辺遺跡分布図

河床面の低下による段丘崖の形成といった自然環境の変化に求める意見もある（高橋1996）。

中期後半段階の平地部の遺跡分布は極めて不明瞭である一方，青ノ山や飯野山の山頂部，城山南麓などから中期後葉から後期初頭頃の遺物の出土が報告され，高地性集落の可能性が指摘されている。こうした高地性集落を支える平野部の集落の不在は気になるところだが，周辺域で銅鐸など青銅製祭器の出土遺跡が現状では皆無である状況も，こうした動向を反映した可能性がある。また，長者原遺跡や郷師山遺跡は，比高約30m以上の丘陵斜面に立地するが，多量のサヌカイト製石器が出土していることから，通有の高地性集落とは性格が異なり，石器生産を目的とした集落の可能性を想定する意見もある。

一転して後期には，集落の増加・拡大傾向に拍車がかかり，耕地開発も進展するとみられる。後期後半から終末期には，下川津・川津一ノ又遺跡に代表される拠点的な大集落が出現し，鉄素材や朱といった非自給物資の地域内への流入や，それに付随した複数系統の他地域系土器の搬入が認められる。

古墳時代になると，その当初は概ね弥生終末期から継続して集落が営まれ，集落規模には変動が予想されるが，大きな断絶はみられない。しかし，前期中葉頃までにはほぼ一斉に各集落は途絶し，以後後期後半頃まで本地域では集落の様相を窺うことは出来ない。一方，古墳の分布は，大束川下流域を中心に数系列の首長墓系譜がみられ，最も後出する本地域最大規模の田尾茶臼山古墳（全長76.5m）は，中期初頭に下る可能性が想定される。また，全長約35mといった小規模な前方後円墳飯山町三の池古墳もみられ，多様な階層の首長層が前方後円墳築造に参画した可能性が想定される。

しかし，こうした前方後円墳系譜も，中期中葉頃には畿内色の強い大川町富田茶臼山古墳の築造以降

大きく衰退し，各地域で断絶期を迎える。おそらくは畿内政権による直接的で決定的な政治的介入が，この頃になされたとみて良い。本地域においても，田尾茶臼山古墳以降の前方後円墳系譜は明確ではなく，径30mクラスの大型円墳さえも築造されない。径10m前後で少量の鉄鏃等の武器類を副葬した飯山町城山古墳群などが確認されているに過ぎない。

こうした古墳築造の停滞した状況は，横穴式石室の導入時期まで継続する。玄室床面積6㎡以上の大型石室もしくは武具や馬具等を副葬した首長墓墳は，青ノ山縁辺と飯野山南麓を中心に分布する。青ノ山古墳群では，宝塚支群4号墳と竜塚古墳が知られている。また，飯野山周辺では，久保大塚古墳があり，出土した須恵器（TK10型式期）から導入期の横穴式石室となる可能性が高い。しかし，これら首長墓墳も，周辺の古墳と比較して必ずしも傑出した存在ではなく，三豊平野に築造された3基の巨石墳とは比肩すべくもない。

集落遺跡は，こうした古墳の動向と概ね合致して展開する。下川津・川津中塚・川津井手の上・川津一ノ又・川津東山田・川津川西遺跡等で，当該期の集落跡が検出されている。特に，下川津遺跡では大型建物群が検出されており，おそらくは上記した首長墓墳の被葬者等を含む有力階層の居住した居館的な性格を有していた可能性も考えられる。

下川津遺跡でのこうした状況は，7世紀中葉を境に急速に整備・拡充され，そこに「官衙的」性格を読みとる研究もみられる（佐藤1998）。また，多量の畿内系土師器供膳具の出土から畿内地域への貢納の可能性を想定する意見（片桐1997）もある。なお，畿内系土師器については，畿内系の横穴式石室を採用する高松市南山浦古墳群等への副葬例から，畿内中枢との結び付きを想定したことがある（蔵本1994）。下川津遺跡の7世紀段階での変質は，畿内地域との関係性を含めて検討する必要があろう。

大束川流域は，古代律令制下においては旧鵜足郡が設置される。古代における集落遺跡の様相は，下川津遺跡以外においては余り明瞭ではない。下川津遺跡では，7世紀代の様相からは緩やかな衰退基調にありながらも，なお12世紀代にかけて大型建物群が継続する。物資流通拠点としての本遺跡の有する立地上の優位性に起因するものであろう。これと関連して，青ノ山周辺と城山南麓には複数の須恵器窯跡が分布し，本地域周縁部にやや集中した様相をみせる。やはり物流拠点としての本地域の特性から，これら須恵器窯も計画的に配置された可能性が考えられる。

また，水田等の耕作痕は，川津一ノ又遺跡で確認されており，それに付随する灌漑水路網は各遺跡で普遍的に検出され，広汎な地域で耕作域が展開していたことが知られる。川津一ノ又遺跡では，幅2～6mの畦畔状遺構が延長約170m以上に亘って検出されている。遅くとも7世紀段階に遡ることは確実で，既にこの時期に地域単位の組織的な労働力の徴発が準備されるほど整備された政治的権力の存在が推測できる。丸亀平野には，北より約30°西に偏した方向をもつ一町方格の所謂条里型地割が，比較的広汎に認められる。これら地割の形成時期については，考古学的資料の分析から7世紀末～8世紀初頭頃が想定（大久保1990・森下1997）されている。こうした土地区画の整備とは別に，大規模な用水路の開削といった耕地開発の進展は，8世紀後半ないし9世紀前半代に下る。この時期は律令体制の変質期と位置付けられ，律令制度の弛緩により在地有力層の私的大土地所有が進展し，構造的な土地所有関係の変化が指摘されている。例えば，川津川西遺跡における灌漑水路SD135の開削も，こうした背景を有しているのであろうが，その具体的様相については今後の課題である。

2. 川津六反地遺跡の調査

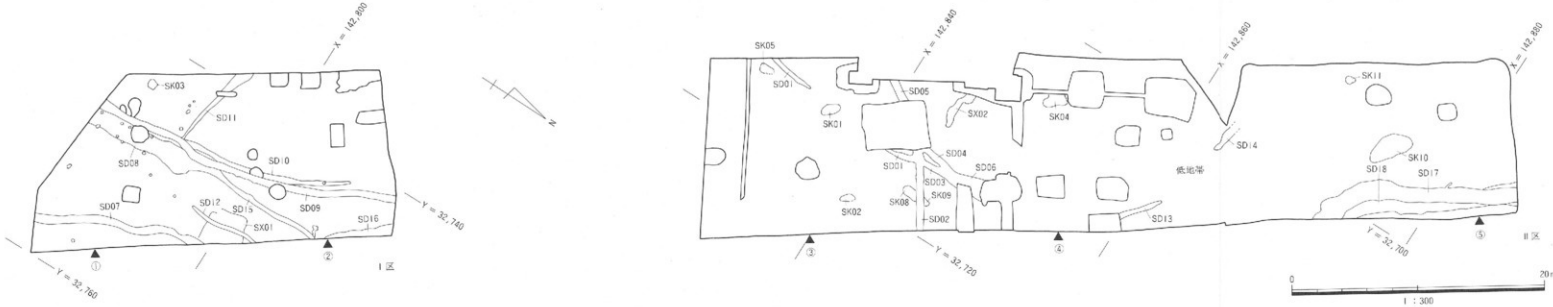
基本層序

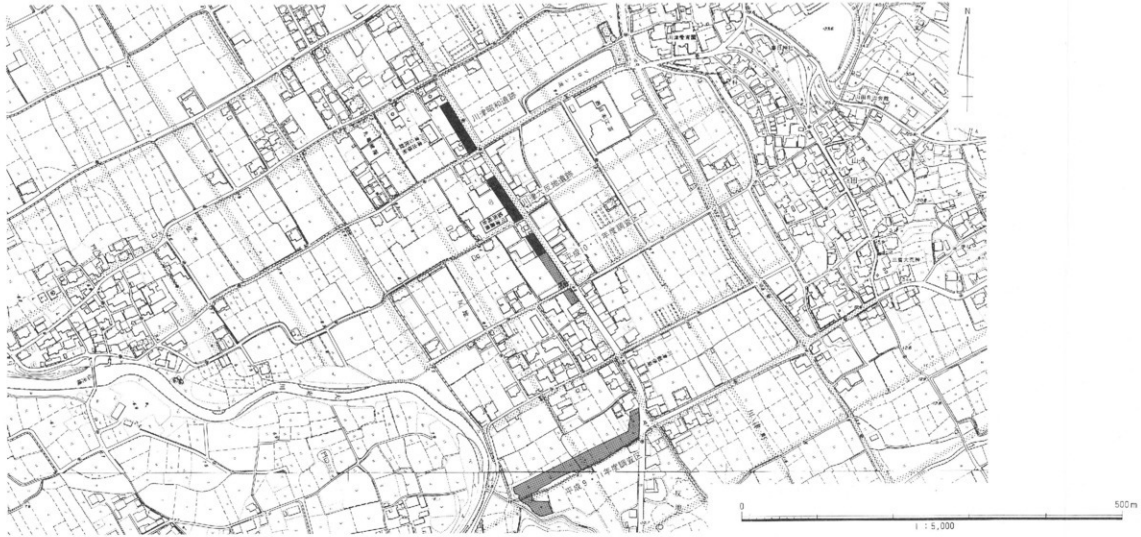
Ⅰ区は，最南端の調査区で平成10年度調査区に北接する。面積約553㎡。調査前は，事業所用地であった。現地表面の標高は9.4m前後。地表下0.7～ 0.8mは盛土層。盛土層下位で，層厚0.1～0.2mの旧耕作土層に至る。旧耕作土層上面の標高は8.6m前後。旧耕作土層下位には，4層程度に細分される各層厚数cm程度の旧耕作土・床土層の水平堆積がみられる（第21図２ｂ～２ｆ層）。これら旧耕土層下が第１遺構面となる。第１遺構面の標高は，調査区南西端で8.35m前後，調査区北東端で8.14m前後を測り，緩やかに北に傾斜する。第１遺構面では，ＳＫ03・ＳＤ07等の遺構が検出された。第１遺構面のベースとなる褐灰色粘土層（同図３ａ層）は，層厚0.08～0.15mでやや西に厚く堆積する。褐灰色粘土層下面が，第２遺構面ａとなり，標高は8.10m前後を測り，第１遺構面同様僅かに北に傾斜する。第２遺構面ａで検出された遺構には，ＳＤ08～09・11・12・15等がある。第２遺構面ｂの包含層となる浅黄色粘質土（同図3ｂ層）は，調査区北半部にのみ認められ，南半部では第２遺構面ａ包含層下面が地山層（黄色系粘土・同図５ａ・５ｂ層）となる。第２遺構面ｂも僅かに北に傾斜し，遺構面の標高は8.05m前後を測る。第２遺構面ｂでは，ＳＤ16，ＳＸ01が検出された。

Ⅱ区は，Ⅰ区の北約25mに位置し，六反地遺跡北端の調査区となる。面積1,184㎡。調査前は，事業所用地及び宅地であった。現地表面の標高は9.0m前後。地表下0.7～0.8mは盛土層。盛土層下位で，層厚0.1～0.2mの旧耕土層に至る。旧耕土層下には，最大４層程度に細分される各層厚数cm程度の旧耕土・床土層の水平堆積が認められる（同図２ｇ～２ｍ層）。これら旧耕土層群下面が第１遺構面となる。第１遺構面の標高は，調査区南端で8.0m前後，北端で7.8m前後を測り，緩やかに北に下る。第１遺構面では，ＳＤ01～06の溝状遺構が検出された。第１遺構面のベースとなる褐灰色粘土層（同図３ｃ・３ｄ層）は，層厚数cmの薄層で，調査区ほぼ全域に広く堆積する。調査区中央部で検出した低地帯堆土との分層は困難で，低地帯堆没に連続して堆積したものと考えられる。遺物量は極めて乏しく，少量の土器片などが出土したに過ぎない。本層下面が第２遺構面となる。第２遺構面の標高は7.8m前後で緩やかに北に傾斜し，また一部は低地帯堆土下面で当該時期の遺構を検出した。本遺構面では，ＳＰ01，ＳＫ01・02・04～11，ＳＸ02の遺構が検出され，弥生前期から後期の遺物が出土している。第２遺構面のベースとなる黄色系粘土（同図５ｄ・５ｅ・５ｉ層）の上位には，調査区南半部を中心に明黄褐色粗砂混粘土（同図４ａ層）が堆積し，本層から縄文時代と推定される石器ブロックの出土をみた。後述するように，両層は極めて近似しており一連の堆積環境下にあったことが推測できる。黄色系粘土の下位には，調査区南北両端部で砂礫層（同図６ａ・６ｊ層）の盛り上がりが確認されたが，中央部では砂礫層は標高6.4m以深と深く谷状を呈しており，上記した弥生期の低地帯も縄文期以前のこうした完全に埋没しきらない谷部を埋積したものであるといえる。なお，上記した縄文期の石器包含層は，谷部南側の微高地北斜面部に緩やかに北に向けて斜面堆積した包含層となる。

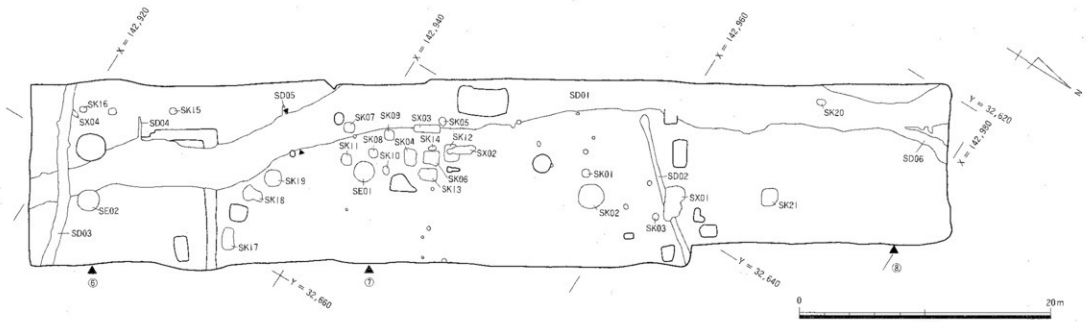
縄文時代の遺構・遺物

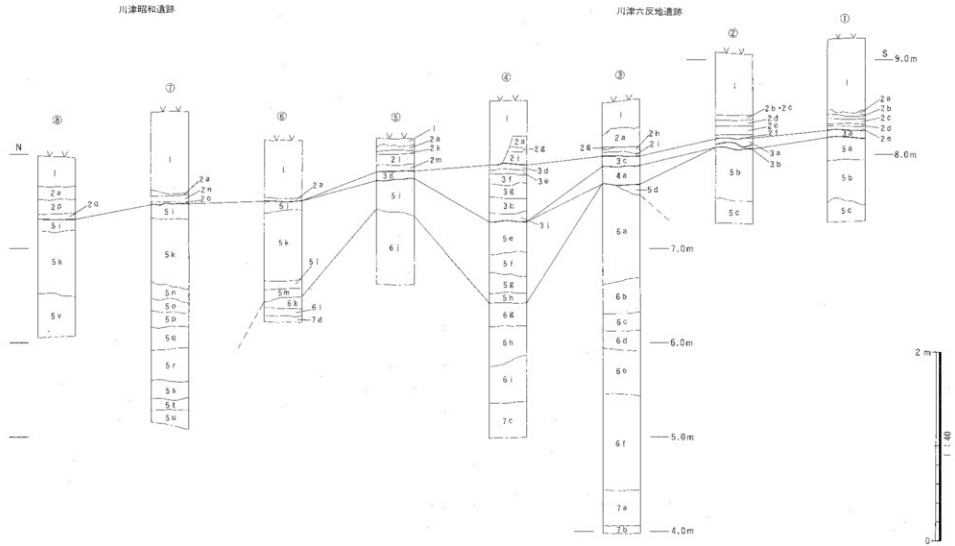
当該時期の遺構・遺物は，前記した弥生時代遺構面のベースとなる明黄褐色粗砂混粘土層より石器ブロック３とサヌカイト集積遺構１が検出されている。この包含層は，Ⅰ区北部を最高所とする微高地北斜面に堆積した包含層で，標高7.5～7.9mにかけて堆積し，緩やかに北に傾斜する。包含層は，北部を弥生期低地帯により削奪され消失し，南・東・西は調査区外へ延長する。Ⅰ区では包含層の広がりは確





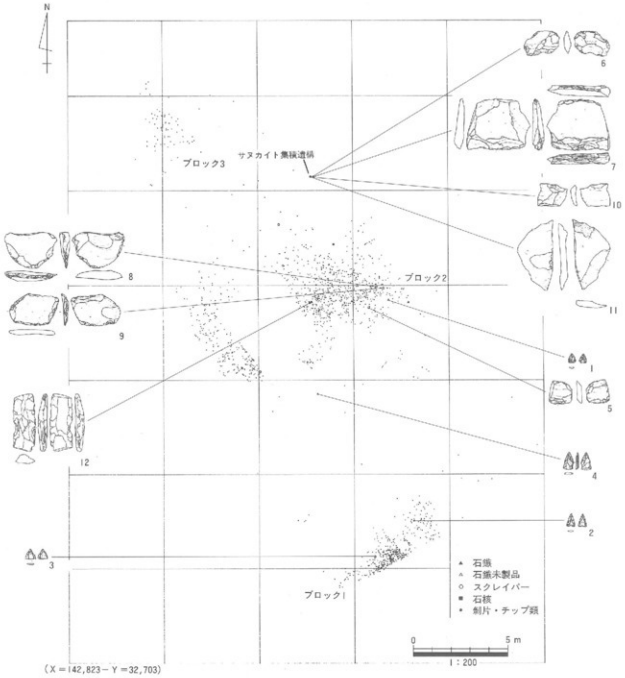
第20図　川津六反地遺跡遺構平面図（▲は土層柱状図実測位置を示す。），調査区位置・条里型地割想定図





第21図　川津昭和遺跡遺構平面図（▲は土層柱状図実測位置を示す），土層柱状図

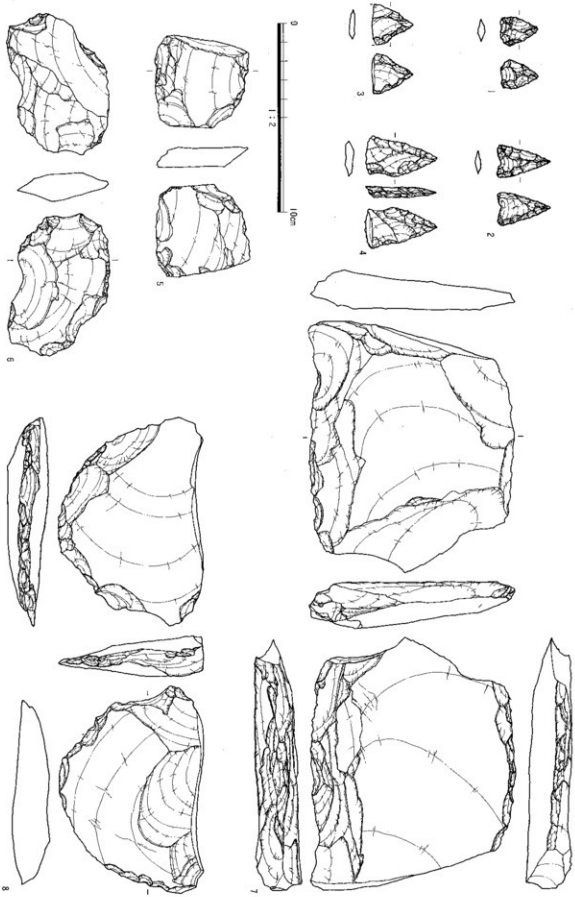
1．盛土・攪乱土
2a．耕作土
2b．明黄褐色粘質土(床土)
2c．灰色粘土(旧耕作土)
2d．黄色粘質土(旧床土)
2e．灰白色粘土(旧耕作土)
2f．灰色混明黄褐色粘質土(旧床土)
2g．浅黄色粘土(床土)
2h．灰白色粘土(旧耕作土)
2i．黄色混灰白色粘土(旧耕土)
2j．黄色混灰白色粘質土(旧床土)
2k．黄橙色砂混粘土(床土)
2l．黄色混灰白色粘土(旧耕作土)
2m．灰色混黄色粘土(旧床土)
2n．灰白色粗砂混シルト(旧床土)
2o．灰白色粘質土(旧床土)
2p．オリーブ灰色粘質土(床土)
2q．灰白色粘土(旧床土)
3a．褐灰色粘土(Ⅰ区第２遺構面ａ包含層)
3b．黄褐混浅黄色粘質土(Ⅰ区第２遺構面ｂ包含層)
3c．黄褐混褐灰色粘土(Ⅱ区第２遺構面包含層)
3d．褐灰色粘土(低地帯埋土)
3e．灰オリーブ色粘土(低地帯埋土)
3f．明黄褐色粘土(低地帯埋土)
3g．黒褐色粘土(低地帯埋土)
3h．褐灰色粘土(低地帯埋土)
3i．黒褐色粘土(低地帯埋土)
4a．明黄褐色粗砂混粘土(縄文期石器包含層)
5a．黄褐色粘土(無遺物層)
5b．灰色混黄色粘土(無遺物層)
5c．黄色混灰白色シルト質粘土(無遺物層)
5d．灰色混明黄褐色粗砂混粘土(無遺物層)
5e．黄色粘土(無遺物層)
5f．黒褐色粘土(無遺物層)
5g．灰白色混明黄褐色粗砂混粘土(無遺物層)
5h．褐灰色粗砂混粘土(無遺物層)
5i．灰色混明黄褐色砂混粘土(無遺物層)
5j．黒褐色粘土(無遺物層)
5k．黄色粘土(無遺物層)
5l．明黄褐色粘土(無遺物層)
5m．明オリーブ灰色シルト質粘土(無遺物層)
5n．にぶい黄褐色シルト質粘土(無遺物層)
5o．灰色混黄橙色粘土(無遺物層)
5p．褐灰色粘土(無遺物層)
5q．黄色混灰白色粘土(無遺物層)
5r．明黄褐色粘土(無遺物層)
5s．にぶい黄橙色シルト質粘土(無遺物層)
5t．黄灰色シルト(無遺物層)
5u．明緑灰色シルト(無遺物層)
5v．褐色粘土(無遺物層)
6a．黄色混黄灰色砂礫・灰白色中砂・褐灰色粗砂ラミナ(無遺物層)
6b．灰黄色中～粗砂(無遺物層)
6c．青灰色細～中砂(無遺物層)
6d．黄橙色砂礫(無遺物層)
6e．灰色砂礫(無遺物層)
6f．暗青灰色砂礫(無遺物層)
6g．褐灰色粗砂質土(無遺物層)
6h．明黄褐色中砂・灰色中砂・黄褐色粗砂ラミナ(無遺物層)
6i．オリーブ灰色砂礫(無遺物層)
6j．褐色混褐灰色粗砂質土・黄灰色粗砂・灰色粗砂ラミナ(無遺物層)
6k．褐灰色～明赤褐色細～中砂・灰白色シルト質粘土ラミナ(無遺物層)
6l．褐灰色～明褐色中～粗砂・明褐色細砂ラミナ(無遺物層)
7a．黒色粗砂混粘土(無遺物層)
7b．青灰色粘土(無遺物層)
7c．灰色粘土(無遺物層)
7d．灰色粘土(無遺物層)



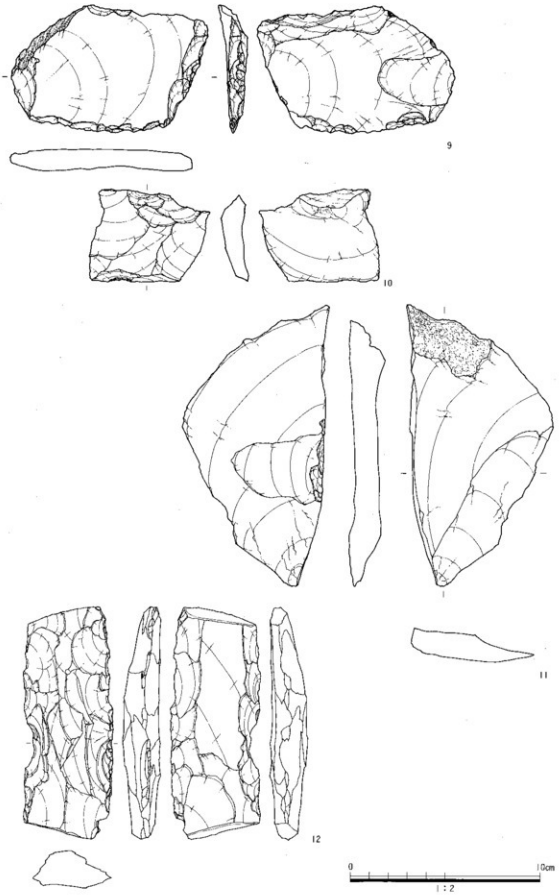
第22図　出土石器分布図

認されず，また低地帯北部でも層の延長は確認できなかったことから，南北の分布範囲は50m以内と推測できる。なお，調査区内での同層序の広がりは，約340㎡であった。上記したように，包含層の下位には，黄色粘土層が厚く堆積するが，この層には石器は含まれない。しかし，両層は酷似しており，近接した時期の堆積を想像させる。なおこの黄色粘土層は，大東川下流域の平野部でしばしばみられる弥生期以降の遺構面のベースとなる層序の一つである。

さて，出土した総石器数は約1,600点，この内定型石器は石鏃３点，同未製品３点，スクレイパー６点，石核５点の計17点（全石器の約１％）で，その他残りは剝片・チップ・加工のみられない原石である。



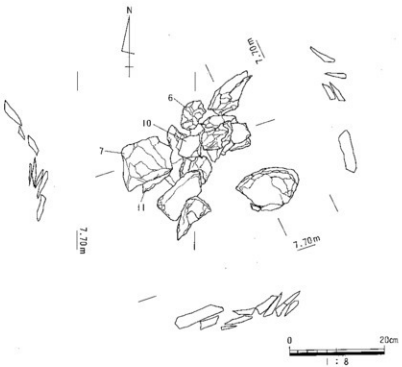
第23図　川津六反地遺跡出土遺物実測図Ⅰ



第24図　川津六反地遺跡出土遺物実測図 2

石器ブロックは3箇所で確認している。ブロック1・2は径10m前後の広範囲なブロックで，複数ブロックの重複の可能性もあるが，それは今後の出土石器の分析に委ねられる。ブロック3は，長径4.5m程の前者に比べると小規模なもので，これが本来的な在り方であるかも知れない。

サヌカイト集積遺構は，ブロック2の北側で，石器分布の稀薄な中で出土した。板状石核素材となりうる剥片を中心とした24点の石器が折り重なるように出土しており，2点のスクレイパー（第23図6・7）と2点の石核（10・11）を含む。同様な集積遺構は，丸亀市平池南遺跡（晩期），愛媛県馬島亀ヶ浦遺跡（後期），広島県洗谷貝塚（後期）例などと共通する。



第25図　サヌカイト集積遺構平・断面図

出土した石器石材はすべてサヌカイトである。濃灰色系，灰色系，縞目状と色調等は数種認められるが，肉眼観察による限りでは，すべて遺跡東約2.5kmに位置する金山産とみられる。今後の理化学的な分析を必要とするが，現状では金山産サヌカイトのみの集約的な石器製作の作業場と考えている。

おおよその石器組成を概観する意味で，12点の資料を抽出して図示した。第23図1は平基式，2は弱凹基式の石鏃である。図示した以外に，やや抉りの深い凹基式のものも出土しているが，典型的な鮭股状のものはない。3・4は石鏃未製品で，共に基部の調整を欠く。4はやや大型であり，石槍切先の可能性もある。5～9はスクレイパー。7は石核を転用したもので，背部には潰し加工がみられる。10～12は石核。いずれも剥片剥離は顕著ではなく，長さ数cm程の小形の剥片が数枚剥がされているのみ。12は，石槍に転用しようとして破損したため，廃棄した可能性がある。

これら石器群の時期については，包含層中の土器資料が皆無なため不明である。ただ，後述するように包含層を切り込むSP01より弥生前期前葉頃の土器が出土しており，これより先行することはまず間違いない。また，石鏃の形態は，縄文後期とされる普通寺市永井遺跡や国分寺町六ツ目遺跡例と比して違和感はないが，六ツ目遺跡では剥片剥離技術にいわゆる両極技法が卓越するのに対して，本遺跡ではそれが低調であるなどまだ検討課題を残す。また，地理学的な面では，瀬戸内沿岸の臨海平野部の扇状地帯及び三角州帯において，縄文後期から晩期にかけて黄色系シルト・砂の堆積が進行したことが想定されている（高橋1995）。この点は，上述した調査所見と矛盾はなく参考としたいが，なお細かな位置付けに課題を残す。理化学的な分析では，包含層中の火山灰分析や，包含層下位の泥炭層（第21図7a層）より出土した自然木試料について，C14年代測定を実施している。考古学的な手法と共に，理化学的な分析値を加味して，今後細かな年代を詰めていく必要があろう。

ＳＰ01　Ⅱ区南端第２遺構面で検出。径0.2m程の略円形を呈し，残存深は0.25m。埋土は黒褐色粘土。上記した縄文期石器ブロック調査中に確認したため，掘り方の一部を捉えることはできなかった。

埋土中より折り重なるように，小片を含め同一個体とみられる約30点程の弥生土器片が出土した。口縁部と底部は接合しなかったが，類似した胎土を有することから同一個体として第26図16に図示した。如意状口縁を有する甕で，強く折り返した口縁端部にヘラ状工具による刻み目文を施すが，器壁に押しつけながら横引きしたためか端面は潰れたいびつな平坦面状を呈する。底部外面にはハケ調整の後やや密なミガキ調整が施される。類似した資料は，下川津遺跡ＳＨＩ01中群にあり（森下・信里1998），前期前葉頃に位置付けられる。

ＳＫ10　Ⅱ区北部第２遺構面で検出。平面形は，長軸3.54m，短軸1.60mの南北に長い歪な隅丸長方形状を呈する。残存深は1.14mと深く，断面形は概ね逆台形状を呈する。埋土は６層に細分された。開削後一定期間オープンな状態であったらしく，下位層は西壁寄りで中位に壁面崩落による斜面堆積をみせるが，概ね穏やかな環境下で堆積したとみられ黒色系粘土が水平堆積する。上位２層は，土坑埋没後に再度掘り込まれた土坑状の落ち込みに堆積した土層で，まだ完全に埋没しきらない段階で何らかの用途に再利用された可能性がある。遺物は，埋土中位より少量の弥生土器小片とサヌカイト製打製石斧転用楔形石器及び削片数点が出土したのみ。出土した遺物より弥生中期後半頃とみられるが，断定するまでには至らない。遺構の性格については，底面付近で透水層である粗砂層を掘り抜いていることから，井戸の可能性が考えられる。

ＳＤ08　Ⅰ区南半部第２遺構面ａで検出。土層断面の観察によりＳＤ09より先行する。検出幅0.5～2.0m，残存深0.06～0.40mで，断面形状は皿状ないしは逆台形状を呈し，概ね直線的にN6.2°Wに配される。南端は調査区外へ延長し，北端はやや屈曲してＳＤ15が北方向に延びる。底面の標高は，南端で7.80m，北端で8.05mとなり，底面の高低差から南流するものと考える。埋土は，溝南半部を中心に３層に細分された。いずれも褐色系粘土が堆積するが，中位層はやや粗砂を多量に含み稀薄な流水下の堆積が想定され，一定程度埋没が進行した後上面より再掘削された可能性がある。遺物は，28ℓ入コンテナ1/4箱程度の弥生土器広口壺・甕・高坏・小形鉢，サヌカイト製スクレイパー・楔形石器・剝片が出土した。１点のみ図示した。第26図４はくの字外反口縁の甕。端部は四角く納める。後期中葉から後半代に位置付けられよう。

ＳＤ09　Ⅰ区第２遺構面ａで検出。調査区中央部を南北に縦断して検出され，中央部でクランク状に屈曲し，南半部でN9.0°W，北半部でN16.1°Wに概ね直線状に配される。土層断面の観察により，ＳＤ08・10より後出する。検出幅0.50～0.76m，残存深0.18～0.33mを測り，断面形は逆台形状ないしは箱形を呈する。埋土は３層程度に細分され，南半部を中心に埋没後の再掘削の痕跡が明確に認められた。南半部では再掘削の掘り込みは溝底面近くまで達しており，出土した遺物の大半は再掘削後に埋没したものである。底面の標高は，7.8m前後で一定しており，高低差から流下方向を特定することは困難である。遺物は，コンテナ1/4箱程度の弥生土器壺・甕・高坏・小形鉢，サヌカイト製打製石庖丁・打製石斧転用楔形石器削片・剝片が出土した。内５点を図示した。第26図１・２は中形甕。いずれも口縁部を上方へ大きく摘み上げて幅広の端面を作り出し，そこに２ないし３条の凹線文を施す。３は緩やかに外反して開く口縁形態の甕。端部はやや下方へ摘み出し，端面に１条のにぶい凹線文を施す。10はやや粗製の脚台部。後期後半から終末期頃の深鉢形態の中形鉢にこうした脚台を付加する例を認める。13は底部。

分厚い安定した平底を呈し，内面はケズリ調整が顕著。胎土中にやや多量の黒雲母粒を認める。1・2は後期前葉を中心とした時期に，3・13もほぼ同時期としてよいだろう。

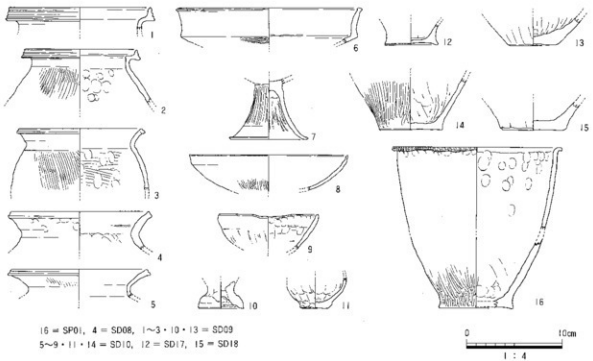
ＳＤ10　Ⅰ区第２遺構面ａで検出。ＳＤ09より先行する。南端は，ＳＤ09に切られ延長方向は不明瞭となるが，この部分で上記したＳＤ08の溝幅が大きく膨らむことから，ＳＤ08に合流していた可能性が高い。検出幅0.26～0.41m，残存深0.03～0.15m，断面形は浅い皿状を呈する。溝底面の標高は，8.00m前後で一定しており，流下方向の特定は困難である。遺物は，コンテナ1/2箱程度の弥生土器壺・甕・高坏・小形鉢，サヌカイト剥片，安山岩？製砥石が出土している。7点を図示した。第26図５は，くの字外反口縁の甕。口縁端部は僅かに肥厚させて，端面に鈍い１条の凹線文を施す。６は高坏坏部。坏上半部は直立気味に立ち上がりやや外反して開く。端部は内外へ弱く摘み出し，端面には鈍い沈線状の段を認める。坏下半部外面はミガキ調整が認められるが，高松平野中枢部の高坏に特徴的な分割ミガキ調整ではなさそうだ。また，胎土の点でも，黒雲母粒を多量に含む特徴的な素地粘土が選択される。７はスカート状に開く高坏脚部。端部は鈍く屈曲して丸く納める。多量の黒雲母粒が含まれる。８は浅皿形態の中形鉢。口縁部は直立気味に立ち上がり，端部を弱く外反させる。黒雲母粒がやや多く認められる。９はやや深めのボール状を呈する小形鉢。外面には成形時のクラックを認め，外型成形の可能性が想定される。多量の黒雲母粒を含む。11は粗製の小形鉢。器表面の凹凸が顕著な粗雑な調整で，外底面はケズリ調整が施される。14は底部。突出気味の安定した平底を呈する。本例も多量の黒雲母粒を含む。14は後期中葉を中心とした時期に，５・６は後期後半前後に，７～９・11は終末期前後にそれぞれ位置付けられよう。その他図示してはいないが，中期後葉頃の甕口縁部片がある。

ＳＤ11　Ⅰ区第２遺構面ａで検出。調査区西半部をN81.1°W方向にほぼ直線状に配され，東端はＳＤ09に切られるが，ＳＤ10同様ＳＤ08に合流していた可能性が高い。検出幅0.24～0.70m，残存深0.03～0.15m，断面形は皿状ないしは逆台形状を呈する。埋土は黒褐色粘土の単層。底面の標高は，東端で8.08m，西端で8.00mを測り，僅かな高低差を評価すれば西流していた可能性が高い。遺物は，１点の弥生土器片が出土したのみで，明確な時期は不明である。

ＳＤ12　Ⅰ区第２遺構面ａで検出。調査区東端部をN6.6°W方向にほぼ直線状に配され，ＳＤ15とほぼ並行する。検出幅0.22～0.28m，残存深0.10m，断面形はU字状を呈する。埋土は褐灰色粘土の単層。底面の標高は，8.0m前後でほぼ一定。遺物は，サヌカイト剥片が１点出土したのみで，明確な時期を特定することはできない。

ＳＤ15　Ⅰ区第２遺構面ａで検出。上記したＳＤ08北端より派生して，N1.0°E方向に概ね直線状に延長する。検出幅0.36～0.42m，残存深0.10～0.16m，断面形は逆台形状を呈する。埋土は，褐灰色粘土の単層で上記ＳＤ12に酷似しており，近似した流路方向とも合わせ近接した時期に開削・埋没した可能性が高い。底面の標高は，北端部で7.97m，南端部で7.90mを測り，高低差から南流してＳＤ08に流下していたものと考える。遺物は，数点の弥生土器片とサヌカイト楔形石器削片・剥片各１点が出土したに限られる。なお，図示してはいないが，中期後葉に位置付けられる甕口縁部片がある。

ＳＤ16　Ⅰ区第２遺構面ｂで検出。調査区東壁に沿って検出したため，全体の形状・規模は不明。検出幅0.4m以上，残存深0.08mで，断面形は概ね逆台形状を呈するが，底面には多数の鋤先痕とみられる起伏がみられる。検出範囲が狭いため，流下方向は不明。埋土は黒褐色粘土の単層である。遺物は，出土しておらず時期を特定することはできない。遺構面の関係から，弥生中期後葉以降には下らず，Ⅱ区ＳＰ01に近接した時期を想定することもできる。



第25図　川津六反地遺跡出土遺物実測図３

ＳＤ17　Ⅱ区北部第２遺構面で検出。土層断面の観察から，ＳＤ18より後出する。調査区東壁際で検出し，南端部は緩く屈曲して調査区外へ延長する。屈曲部以北は，N29.8°Wの方向にほぼ直線状に配される。検出幅1.10～1.36m，残存深0.27～0.38m，断面形は概ね逆台形状を呈する。埋土は２層に細分され，下位層に流水下の堆積とみられる粗砂をラミナ状に含む。底面の標高は，7.30mで一定しており流下方向は不明。後述するＳＤ18とほぼ重複して開削されており，ＳＤ18埋没後の改修溝の可能性も考えられる。遺物は，弥生土器片やサヌカイト楔形石器剥片・剥片が少量出土したのみである。１点のみ図示した。第26図12は，下層より出土した底部片である。底部外縁を強く下方へ摘み出し，底面はやや上げ底気味となる。同一個体とみられる体部片が近接して出土しており，その肩部にはヘラ状工具による刺突文が巡らされる。中期後葉を中心とした時期に位置付けられよう。その他土器片も，ほぼ同時期とみられるものであり，溝の埋没時期の下限を示すものと考える。

ＳＤ18　Ⅱ区北部第２遺構面で検出。上記ＳＤ17とほぼ重複する。概ねN36.6°W方向に配された直線溝とみられる。検出幅1.55m，残存深0.27m，断面形は逆台形状を呈するとみられる。埋土は２層に細分され，下位層には粗砂層が薄く堆積する。底面の標高は7.35m前後で一定する。遺物は，弥生土器片やサヌカイト楔形石器が少量出土したに限られる。１点のみ図示した。第26図15は，下層より出土した底部片である。分厚い安定した平底を呈する。粗砂粒を多量に含むやや粗い胎土で，多量の火山ガラスの混入が特徴的である。前期後葉から中期前葉に遡る可能性があり，また同時期とみられる土器片も微量ながら出土していることから，溝の開削時期の一点を示している可能性もある。

3．川津昭和遺跡の調査

基本層序

川津六反地遺跡Ⅱ区の北約40mに位置し，調査面積約1,300㎡を測る。西側民地部への進入路の都合上，

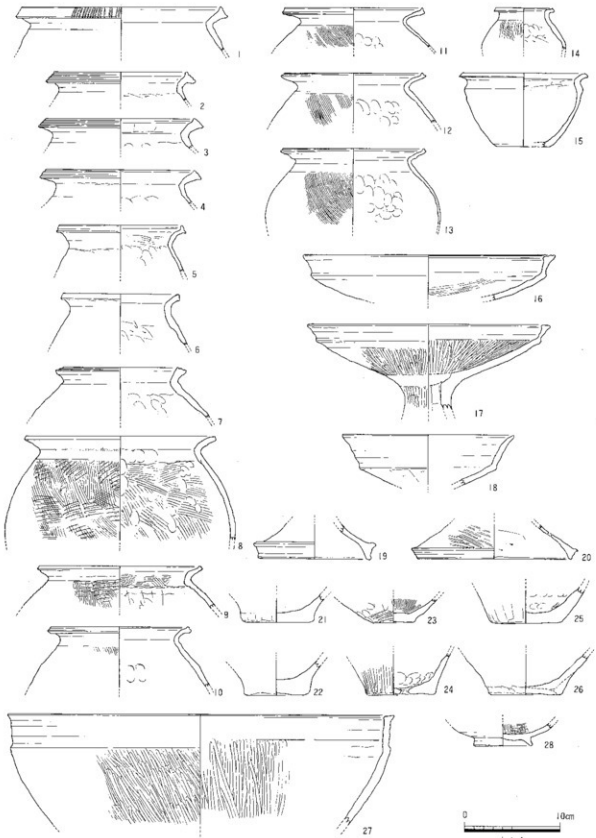
3調査区に区分して調査を行った。調査前は，南2調査区が宅地，北調査区が駐車場用地であった。現地表面の標高は，8.5m前後。地表下0.6～1.0mは，盛土層が堆積し，盛土層下位で，層厚0.1～0.3mの旧耕土層（第21図2a層）を検出した。旧耕土層下位には，最大3層に細分される層厚各数cm程の旧耕作土・床土層（同図2o～2q層）が水平堆積し，旧耕土層群下面が遺構面となる。遺構面の標高は，調査区南端で7.50m前後，調査区北端で7.25m前後となり，緩やかに北に傾斜する。

遺構面のベースとなる地山層は，調査区北半部では黒褐色粘土層（同図5j層）が，調査区南端部付近では同層が削除され，下位の黄色粘土層（同図5k層）が露出する。北部の黒褐色粘土層は，調査時包含層の可能性を考え第2遺構面包含層として一部掘り下げを行ったが，遺物の出土は見られず，また下面で遺構の検出も認められなかったことから，地山層と判断した。上部地山層の黄色粘土層は，六反地遺跡より連続する黄色粘土層群（同図5b・5e・5i層）の一部で，調査区周辺では層厚70cm前後と厚く安定して堆積する。下位地山層となる砂～砂礫層の堆積は，調査区南端部では標高6.5mと比較的浅い位置で確認された（同図6k・61層）が，北半部では標高5.1m以深ともぐりこみ，谷状地形となる。谷部は，縄文期の堆積が想定される灰色～褐色系の粘土・シルト層で埋積されており，六反地遺跡II区低地帯とは異なり，弥生期までには谷の埋没は完了している。なお，本年度調査区での，六反地・昭和遺跡の最終遺構面は，概ね0.4%の勾配で北に下る。

弥生時代の遺構・遺物

SD01　調査区西際を南北に縦断して検出された幹線水路である。溝埋没後に，溝中央部の僅かな窪地を利用して，幅1.0～1.3m・深さ0.2～0.3m程の小溝が穿たれる。この溝は，頻繁に蛇行しながら南北流するが，その振幅は概ねSD01の流路幅に収まることから，別個の溝とはせずSD01の上層として調査を行った。また，SD02・04・05・06がそれぞれ東西に分岐する。南北両端は調査区外へ延び，延長約69.5mを検出した。流路方向は，調査区南部ではN60.3°WからN16.5°Wとやや蛇行しつつ，調査区中央部から北部にかけてN30.0°Wと概ね直線状に北西方向に配される。溝は，確認された範囲で幅2.1～4.2m，残存深0.4～0.75m，断面形は概ね逆台形状を呈する。屈曲部分での溝肩部の浸食のため上面幅は一定せず，溝南部を中心に東西両岸部に深さ0.3m程のテラス部を認める。底面の標高は，溝南部で6.75～6.88m，溝中央部で6.80～6.96m，溝北部で6.66～6.90mと検出位置によってかなりの起伏を認めるが，概ね北に流下する。

第27図　SD01土層断面図



4・8・11＝SD01上層，1・6・7・9・12・13・15・16・18・21～24・26＝SD01中層
2・3・14・19・27＝SD01下層，5・10・17・20・25＝SD01底面，28＝SD03

第28図　川津昭和遺跡出土遺物実測図

したことが伺え，その後再度溝が機能した段階に堆積した粗砂層を含め，溝の埋没が進行する検出面までの堆積層を一括した。中央部には，粗砂と粘土のラミナ層が層厚0.2m程堆積し，活発な流水の堆積をみせるが，上面には層厚0.3m程度の粘土層の堆積がみられ，溝機能廃絶後には低湿地状を呈して徐々に埋没したことが想像される。その上面より上記した上層が掘開される。

遺物は，28ℓ入りコンテナ4箱程度の弥生土器，古式土師器，サヌカイト製石鏃・打製石庖丁・スクレイパー・打製石斧転用スクレイパー・楔形石器・石核・剝片等が出土している。溝の埋没時期の指標となる土器資料を中心に，出土遺物を第28図に掲載した。1～9は弥生土器甕，10～13は古式土師器甕，14は弥生土器小形甕，15は小形鉢，16・17・19・20は弥生土器高坏，18は古式土師器高坏，21～26は弥生土器底部，27は弥生土器大形鉢である。1は，上下に拡張した口縁端面にハケ原体による押圧文を施す。中期中葉に遡る。2～4は口縁端面に2～3条の凹線文を施す甕で，端部を上下に強く挽き出す2と，端部の挽き出しがあまく屈曲部より鈍く肥厚させる3・4がある。いずれも中期後葉に位置付けられる。5～9は，くの字外反口縁形態の甕。端部形状にはヴァリエーションがあり，強く上方へ挽き出す5と，四角く納める6・8，小さく上方へ摘み出す9がある。5は後期前葉に遡り，6・8は後期中葉から後半，9は後半から終末期に下る。9には多量の細粒の黒雲母粒が含まれ，筆者のいう雲母土器に近い(蔵本1999aでの砂粒3類土器)。7はむしろ短頸壺に近い形態。端面に粗雑な2条の凹線を挽き，後期前葉に遡る。10は，強く外反して開く口縁端部をやや肥厚させて，端面に鈍い凹線状の段を認める。いわゆる東四国系甕の初現形態である(蔵本1999b)。11～13も東四国系甕で，後出して布留1式併行期に位置付けられる。この内11・13の胎土には，多量の火山ガラス粒が含まれ，川津二代取遺跡での同種甕胎土に共通する。14は，下川津B類甕の模倣形態の小形甕で，体部外面はミガキ調整を施す。胎土中に多量の細粒の黒雲母粒を含む。15は，強く屈曲して開く口縁端部を下方へ挽き出す。後期中葉前後に位置付けられる。16・17は，直立ないしはやや外傾して開く口縁端部を内外に摘み出して，端面に平坦面を作り出す高坏で，16にはその部分に2条の凹線文を認める。坏下半部には，16に分割ミガキの可能性のあるミガキ調整がみられるが，17は在地系の放射状ミガキである。また，胎土の点でも，16は高松平野中枢部の胎土1類土器(森下1995)に酷似する。16は後期前葉に，17はやや後出する時期に位置付けられる。18は深い坏部を有する高坏で，終末期前後に下る。胎土中には，多量の黒雲母が含まれる。19・20は，高坏脚部である。脚端部形状より，下方に強く挽き出しつつ，上端を外方へ摘み出す19が後期前葉頃に，20はそれらの肥厚がやや矮小化しており，若干後出する可能性がある。なお，胎土の面では，20は胎土1類土器に近似する。21～26は，甕もしくは壺底部である。23を除いて，安定した平底を呈しており，後期後半以前に遡る。24は，典型的な雲母土器で，底面中央に焼成前の穿孔を認める。27は，下川津B類土器模倣形態の大形鉢で，体部には放射状のミガキ調整が顕著である。また，多量の黒雲母粒を含む。

上記したように，出土遺物の時期は，弥生中期中葉から古墳前期前葉とかなりの時期幅を有する。中期中葉の資料は，絶対量が乏しく，溝の開削時期をここまで遡らせることはやや躊躇されるため，混入と考えておく。一定量の遺物の出土がみられる中期後葉頃が，溝開削時期の一点を示していると考えておきたい。しかし，溝底面にへばりつくような形で5・17・20・25が出土しており，後期前半代に溝底面に及ぶ改修が行われた可能性が高い。また，下層からは2・3・10・14・18・19・27の出土がみられ，終末期前後には埋没が開始している。中層出土資料から古墳前期前葉頃には埋没が完了しており，その直後に上層が再掘削され，短期間で埋没したと考えられる。

古代の遺構・遺物

ＳＤ03　調査区南端で検出した東西走する溝状遺構である。延長約15mを検出した。現地表面に見られる条里型地割にほぼ合致し，東半部でやや南に屈曲するが，西半直線部分で概ねN61.9°Eに配される。溝の幅0.8～1.2m，残存深0.2m前後で，断面形は概ね皿状ないし逆台形状を呈する。埋土は褐灰色粘土が堆積し，底面付近に粗砂の混入が若干量認められた。底面の標高は，7.20m前後でほぼ一定しており，流下方向は不明である。なお，本溝の西延長部は，平成２年に発掘調査の行われた川津下樋遺跡調査区の南端部に相当するが，調査によって本溝延長部は確認されていない。

遺物は，溝中央部底面よりやや浮いて，黒色土器碗底部片１点が出土した以外は，土師器細片が少量出土したのみで，遺物量は乏しい。第28図28は，黒色土器Ａ類碗。深碗タイプの碗形態と思われ，見込みの平行ミガキや高台形状から，11世紀後半代と考えられる。

4．ま と め

縄文期の資料では，六反地遺跡Ⅱ区包含層より二次的移動の少ない良好な石器ブロックを検出した。接合関係などについては充分な整理を行えていないが，今後の分析により石器製作工程の復元が期待される。器種は，石鏃・石槍・スクレイパーに限られており，生業関係を反映した可能性もある。石材の選択や帰属時期を含めて今後の課題である。

弥生期の資料では，六反地遺跡で中・小規模の水路群が，昭和遺跡で大型幹線水路が検出された。特に中期後葉に開削されたと推定される幹線水路ＳＤ01は，当該時期の遺跡の様相が不明瞭な本地域において，集落遺跡の動態を考察する上で重要な資料を提供した。また，本溝は昭和遺跡の展開する微高地東南縁辺を縦断して開削されたと推測され，その総延長は100m以上に達する。これほどの溝を長期間に亘って維持・管理するためには，複数の農業経営単位による協業が必要である。一方，こうした幹線水路の存続期間に対して，周辺の弥生期の集落の経営期間は遥かに短く，幹線水路の維持に代表される農業共同体間の結合関係は，個別集落の動向に左右されず根強く維持されたとみられる。

古代の資料では，昭和遺跡で条里型地割施工に関する溝資料を提供した。本溝の開削時期については明確にできなかったが，11世紀後半代には機能が衰退し埋没過程にあったことは確実である。当該期には，大東川の下刻に伴う段丘化が進展した可能性が想定されており，本溝の廃絶もこうした地形環境の変更に起因する可能性が高い。

六反地遺跡Ⅱａ区では，縄文期石器包含層の堆積時期を絞り込むことを目的として，Ｃ14年代測定と火山灰分析を行った。以下では，詳細は正式報告に譲り，分析結果を中心に簡単に記しておきたい。

Ｃ14年代測定は，第21図７ａ層より出土した自然木試料３点について行った。分析の結果，３点の試料はいずれも暦年代でＢＣ10,000年前後の値を示し，７ａ層の堆積時期をある程度特定できるものと考える。

火山灰分析は，第21図４ａ層を中心に，上下２～３層の堆積層について火山ガラス比分析を行った。分析の結果，いずれの層序からも火山ガラスが検出され，その形態や色調さらに屈折率から，約6,300年前に噴出した鬼界アカホヤ火山灰に由来することが明らかとなった。

以上の分析結果より，４ａ層の堆積時期は鬼界アカホヤ火山灰降灰以降と判断される。

参考・引用文献

大久保徹也　1990「下川津遺跡といわゆる条里地割について」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ　下川津遺跡』香川県教育委員会他

片桐孝浩　1997「讃岐の土師器」『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター　研究紀要Ⅴ』

蔵本晋司　1994「香川県における古墳時代中期群小墳小考」『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター　研究紀要Ⅱ』

蔵本晋司　1999ａ「中間西井坪遺跡出土土器の胎土分析」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第32冊　中間西井坪遺跡Ⅱ』香川県教育委員会他

蔵本晋司　1999ｂ「讃岐における古墳出現の背景―東四国系土器群の提唱とその背景についての若干の考察―」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第32冊　中間西井坪遺跡Ⅱ』香川県教育委員会他

佐藤竜馬　1998「讃岐における官衙関連遺跡と集落動向」『古代学協会四国支部第12回大会発表資料　律令国家における地方官衙遺構研究の現状と課題』

高橋　学　1995「龍海平野における地形環境の変貌と土地開発」『古代の環境と考古学』古今書院

高橋　学　1996「古代の地形環境と土地開発・土地利用」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告　第７集』

森下英治　1997「丸亀平野条里型地割の考古学的検討」『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター　研究紀要Ⅴ』

森下英治・信里芳紀　1998「讃岐地方における弥生土器の基準資料Ⅰ―下川津遺跡出土前期弥生土器を中心に―」『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター　研究紀要Ⅳ』

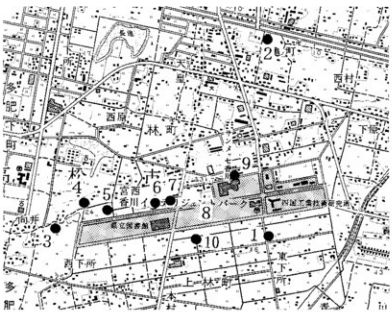
森下友子　1995「胎土１類土器について」『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第４冊　太田下・須川遺跡』香川県教育委員会他

Ⅴ. 上林遺跡

1. 立地と環境

本遺跡の立地する高松市上林町，林町一帯は旧香東川の形成した扇状地のほぼ扇端に位置しており，その東側を春日川の支流，古川が貫流している。

この地域の開発は縄文時代後期にまで遡ることが，北側約1kmの林坊城遺跡で検出された住居跡と出土土器から確認されている。これに続く，近隣の遺跡の発掘調査の成果については，既刊の報告書の記述にゆずるが，本遺跡の北側に隣接する空港跡地遺跡では，13世紀初頭から16世紀中葉にかけての区画溝を伴った居館が検出されており，今回の調査では，関連遺構の検出が期待された。



第29図　遺跡位置図（1／25,000）

また，この地域は第二次世界大戦末期に陸軍の軍用飛行場として造成され，その後は，一部が旧高松空港として共用される一方で，飛行場としての必要のなくなった多くの土地が再び農地に戻されている。その際に施行された方形の地割りが現在に続いており，周辺の条里型地割りとは大きく異なったものとなっている。

そのようなことから，旧空港建設以前の地割りの検出にも期待がもたれる。

2. 調査の成果

上林遺跡は昨年度からの継続調査である。今年度調査区は昨年度調査区の南側に接する部分であり，北からA～G区に区分して調査を実施した。検出した遺構には弥生時代と中世，近世のものがある。

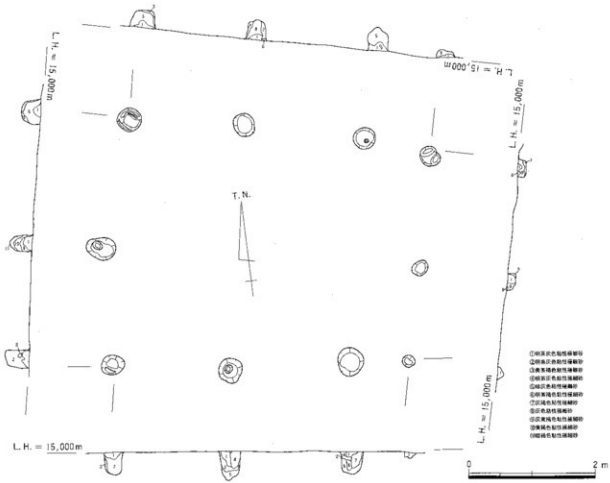
A区　第1面・第2面で遺構を検出した。第1面を中世～近世，第2面を弥生時代後期として報告する。

弥生時代

第2面では，調査区の概ね全般にわたり，黒褐色粘質土を埋土とする不定形の遺構が検出できた。遺物の出土は認められず，詳細な時期については不明であるものの，他の調査区での埋土の事例から弥生時代後期頃に属するものであると想定できる。なお，平面形状がアメーバ状を呈するものは，樹木根であると想定している。

中　世

第1面では，調査区北西隅で東西3間×南北2間の掘立柱建物が1棟検出できた。柱心間距離で東西4.7m×南北3.9mの規模を測る。東壁ではやや距離が縮まる。主軸の方位は，条里型地割に合致しており，N13°Eを測る。また，北・西・南各壁の柱穴の規模は直径30cm・深さ30～40cmを測るが，東壁の柱



第30図　A区ＳＢ01平・断面図（１／60）

穴はいずれも約10cm程度の深さで他の壁を構成する柱穴より浅い。明確に柱穴が検出できなかったが，２間×２間の建物に東向きの庇がついた状態が復元できる可能性がある。

また，調査区南西隅ではこの建物と主軸方位を同じくする溝状遺構ＳＤ02を検出している。幅50cm，深さ５cmと検出規模は小さい。出土遺物も希薄で，時期決定に耐え得る資料ではない。埋土の状況からおそらく中世段階のものと想定できる。

Ｂ区　Ｂ区では２面の遺構面を確認した。上位の第１遺構面では近世の，下位の第２遺構面では弥生時代の遺構がある。第１遺構面では掘立柱建物，溝，鋤溝群などを検出した。これらは条里型地割に規制されており，主軸方向はＮ10°Ｅを測る。検出した掘立柱建物３棟は調査区西側にかたまってあり，東側に鋤溝群がある。両者の間には柵列及び溝がある。これらの遺構からの出土遺物はごくわずかであるため詳細な時期比定はできない。だが，遺構の分布状況から掘立柱建物群と畑を間にある柵列で区画し，配置している状況が見て取れる。

第２遺構面では旧流路と多数の溝がある。調査区南部では南西から東に蛇行して流水するＳＲ01を検出した。ＳＲ01は上面の幅２～3.5m，深さ0.7～１mを測る。下部は抉れがあり，最下層には砂が堆積していることから当初は流水速度がある程度速かったと考えられる。だが，中層，上層では黒褐色系の

粘土が堆積し，この時期には滞水状態に近かったと想定される。ＳＲ01からの出土遺物は多くないが，下層では弥生時代後期後葉から終末にかけての土器，木製の又鍬が出土している。中層，上層からの出土遺物はほとんどないが，上層では打製石包丁１点，最上層の褐灰色粘土内からは中世の土釜口縁部も出土している。よって，弥生時代後期後葉には流水しており，中世以前には埋没したと考えられる。

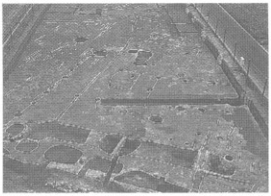


写真11　Ｂ区第Ｉ遺構面全景（北から）

ＳＲ01の上層には黒褐色粘土が堆積しているが，検出面から上層の底場レベルまでの深さは40～50cmを測る。この深さから判断すると黒褐色粘土が堆積していた期間は埋没しきっておらず，流路として機能していた時期を含む。ＳＲ01の付近では同じく東に流下する多数の溝を検出したが，中にはＳＲ01上層と同じ黒褐色粘土を埋土とし，合流する溝がある。ＳＤ12，13，14Ａ，Ｂ，16ａ，ｂがこれに当たり，同時期に流水していたと言える。同時併存の溝の中でもＳＤ12，16ｂはＳＲ01から派生しており，引水している。また，ＳＤ16ｂの取水口は５本の杭からなる杭列が検出された。これは取水量を調整する堰の痕跡であると考え得る。このように取水量の管理を行う目的は水田への給水であることが想定され，２つの溝の機能を用水路であると考えることができる。これはＳＲ01内で又鍬１点と打製石包丁１点などの農具が出土していることからも示唆される。このように考えると取水源であるＳＲ01は基幹水路として機

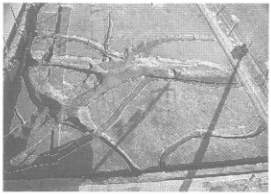


写真12　Ｂ区ＳＲ01及びＳＤ群全景（南から）

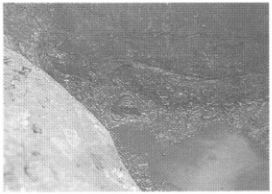


写真13　Ｂ区ＳＲ01土器出土状況（東から）

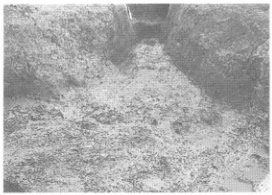


写真14　ＳＤ16ｂ取水口杭列検出状況（西から）

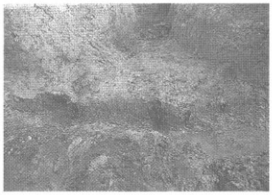
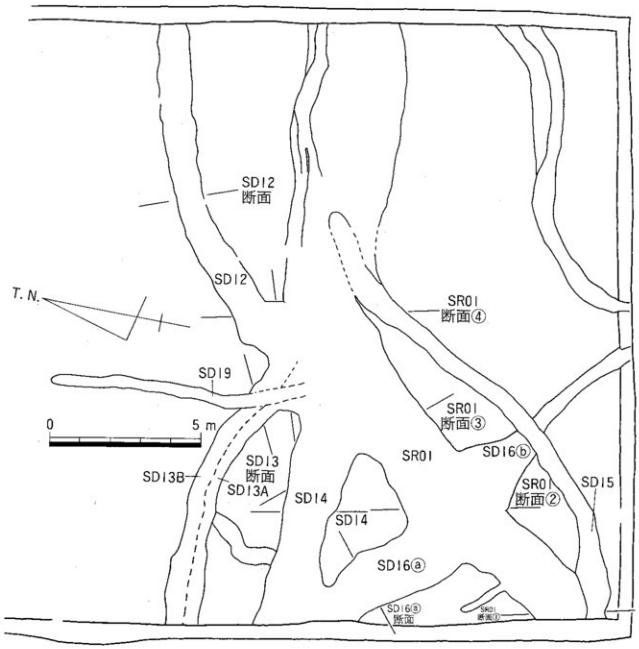
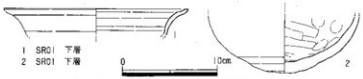


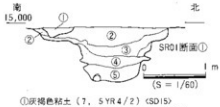
写真15　ＳＤ16ｂ取水口杭列断ち割り状況（西から）



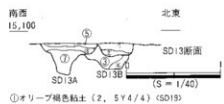
第31図　B区SR01及びSD群平面図（1／125）



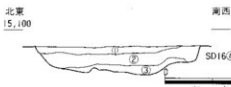
第32図　B区出土土器実測図（1／4）



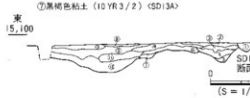
①灰褐色粘土（7．5YR4/2）〈SD15〉
②黒褐色粘土（7．5YR3/2）〈SR01上層〉
③黒褐色粘土（7．5YR3/1）〈SR01上層〉
④褐灰色粘性微砂質土（7．5YR5/1）〈SR01中層〉
⑤褐灰色粗砂（10YR6/1）〈SR01下層〉



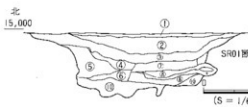
①オリーブ褐色粘土（2．5Y4/4）〈SD19〉
②黒褐色粘土（2．5Y3/2）〈SD19〉
③灰黄褐色粘土（10YR4/2）〈SD13B〉
④褐灰色砂混じり粘土（2．5Y4/1）〈SD13B〉
⑤黄褐色粘土（2．5Y5/6）
⑥黒褐色粘土（10YR2/3）〈SD13A〉
⑦黒褐色粘土（10YR3/2）〈SD13A〉



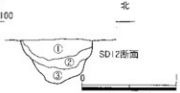
①黒褐色粘土（7．5YR3/2）
②黒褐色粘土（7．5YR3/1）
③灰黄褐色粘土（10YR5/2）



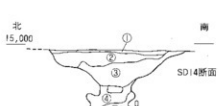
①オリーブ褐色粘土（2．5Y4/4）〈SD15〉
②黄褐色粘土（2．5Y5/6）
③黄褐色粘土（2．5Y5/3）〈SD13A〉
④黒褐色粘土（10YR2/3）〈SD13A〉
⑤黒褐色粘土（10YR3/2）〈SD13A〉
⑥黒褐色粘土（5YR3/1）〈SD13B〉
⑦黄灰色砂混じり粘質土（2．5Y4/1）〈SD13B〉
⑧にぶい黄橙色粘土（10YR7/3）〈中世包含層〉
⑨灰黄褐色粘土（10YR6/2）
⑩灰褐色微砂混じり粘質土（7．5YR4/2）
⑪褐灰色粘土（7．5YR4/1）
⑫暗色粘土（10YR2/1）
⑬黒褐色粘土（7．5YR3/2）



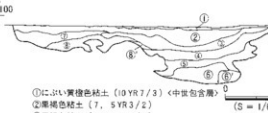
①にぶい黄橙色粘土（10YR7/3）〈中世包含層〉
②黒褐色粘土（7．5YR3/2）
③黒褐色粘土（7．5YR3/1）
④灰褐色微砂混粘質土（5YR5/1）
⑤褐灰色粘土（7．5YR4/1）
⑥黒褐色粘土（10YR3/1）
⑦褐灰色粘性微砂質土（7．5YR5/1）
⑧褐灰色粗砂（10YR6/1）
⑨褐灰色粘質土（10YR5/1）
⑩灰黄褐色粘土（10YR5/3）



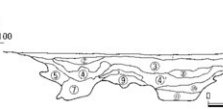
①灰黄褐色粘土（10YR6/2）
②黒色粘土（10YR2/1）
③暗灰色粘土（10YR4/1）



①にぶい黄橙色粘土（10YR7/3）〈中世包含層〉
②黒褐色粘土（7．5YR3/2）
③黒褐色粘土（7．5YR3/1）
④黒褐色粘質土（7．5YR3/2）
⑤ 黒褐色粘質土（7．5YR3/2）細砂ブロック、カーボンを含む。



①にぶい黄橙色粘土（10YR7/3）〈中世包含層〉
②黒褐色粘土（7．5YR3/2）
③黒褐色粘土（7．5YR3/1）
④灰褐色粘土（7．5YR5/2）
⑤褐灰色粘性微砂質土（7．5YR5/1）
⑥褐灰色粗砂（10YR6/1）
⑦ 褐灰色粘土（10YR5/1）
⑧灰黄褐色粘土（10YR6/2）
⑨黒色粘土（10YR2/1）
⑩ ④層との漸移層で、灰色を帯びる。



①にぶい黄橙色粘土（10YR7/3）〈中世包含層〉
②灰黄褐色粘土（10YR4/2）
③黒褐色粘土（7．5YR3/2）　④褐灰色粘性微砂質土（7．5YR5/1）
⑤黒褐色粘質土（7．5YR3/1）　⑥褐灰色粗砂（10YR6/1）
⑦ 黒褐色粘土（7．5YR3/1）④より黒味が強い。
⑧褐灰色粘土（7．5YR6/1）
⑨褐灰色粘質土（7．5YR4/1）
⑩黒褐色粘質土（7．5YR3/1）暗褐色細砂とカーボンを斑状に含む。
⑪灰褐色粘土（7．5YR5/2）
⑫褐灰色粘土（5YR6/1）

第33図　B区SR01及びSD群土層断面図（1／40・1／60）

能したと推測される。1は下川津B類の高坏の口縁部である。口縁部は強く外反する。2は鉢？の底部である。かなり強い丸みを持つ。

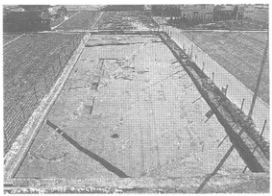


写真16　C区全景（北から）

C区　C区では2面の遺構面を確認した。B区と同じく，第1遺構面で近世の，第2遺構面で弥生時代の遺構を確認した。ただし，調査区東部では第1遺構面のベース土である褐灰色粘質土が削平されており，埋土から近世と考えられる遺構も第2遺構面ベース土である黄褐色系粘質土上で検出された。第1遺構面に伴う遺構としては掘立柱建物1棟，溝，鋤溝群などがある。これらはやはり条里型地割に規制された主軸方向を持つ。第2遺構面では溝，土坑を検出しているが，遺構は希薄である。

なお，遺構の中には埋土から判断して，中世の遺構である可能性が高いものもあるが，掘り込み面は第2面ベース土である。これは中世段階の遺構面が近世の耕作等により削平を受けているためであろう。

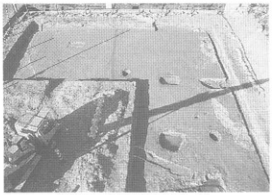


写真17　E区全景（南から）

E区　北半のみ成果を報告する。旧状が宅地であったことから，建物の基礎による攪乱が著しく認められた。遺構の密度も低く，土坑3基・ピット2基・溝状遺構1条・自然流路1条を検出できたのみである。いずれも遺物の出土がほとんどなく，埋土の状況から，溝状遺構SD01のみが中世段階のものと想定される。

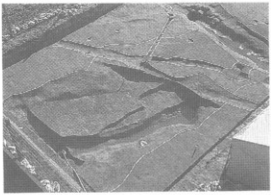
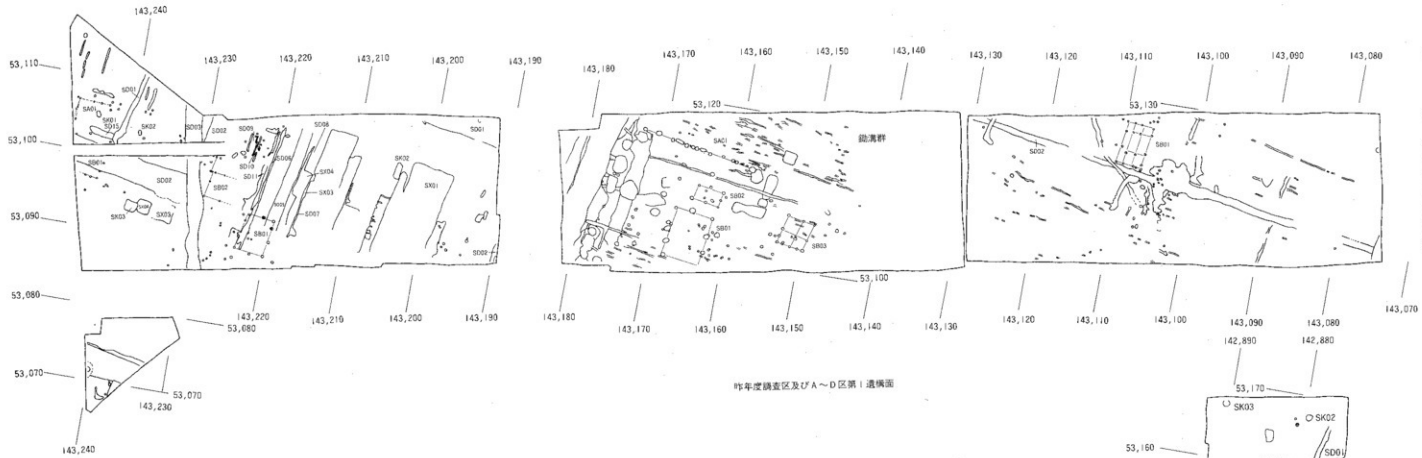


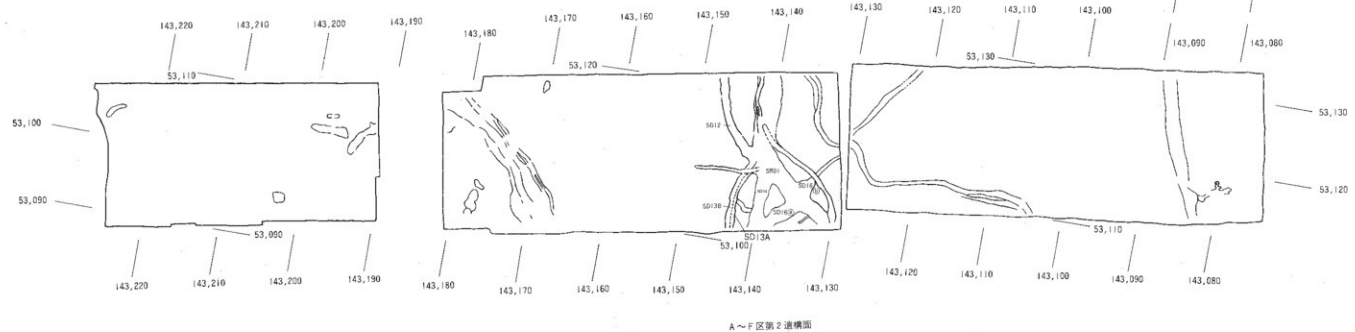
写真18　F区全景（北西から）

F区　東半のみ成果を報告する。検出した遺構は，ピット6基・溝状遺構4条・自然流路3本・土坑1基・性格不明遺構1基である。ピット・土坑・性格不明遺構はいずれも近世の遺構である。溝状遺構と自然流路SR03は弥生時代の遺構である。いずれも出土遺物が乏しく，詳細な時期については不明であるが，SR03底部より出土した遺物から，弥生時代後期から終末期にかけて掘削されたものであることが想定できる。最終埋没は不明である。

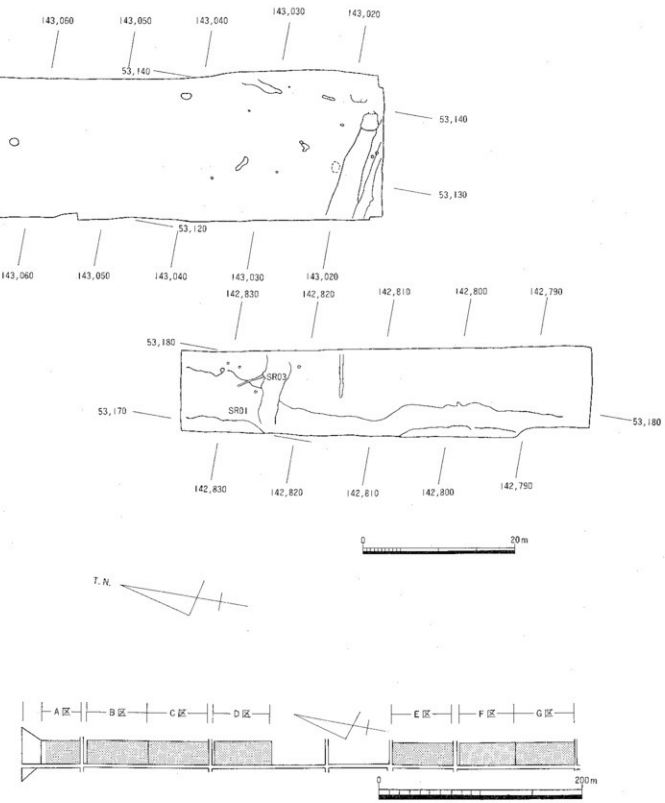
自然流路SR01・02はいずれもSR03に先行する自然流路である。SR01は上層から下層までほぼ黒褐色粘質土が堆積していて，当時の周辺環境が低湿地状を呈していたことが想定できる。出土遺物はほとんどなく，わずかに中層で甕の底部が出土しているが，劣化が著しく，所属時期は不明である。

SR02はSR01に先行する流路である。SD01の北側で全面掘削をしたが，遺物の出土は認められず，詳細な時期については不明である。





第34図　遺構配置図（1/1,000）



第35図　調査区割図

3. ま と め

〈弥生時代〉B区では弥生時代後期後葉以降の旧流路（SR01）とこれに合流する溝を検出した。溝の中にはSR01から取水するものがあり，用水路であると想定される。用水路は東に流水しており，水田域の一部は東側に存在したと考えられる。これに対応する集落域については明確にできなかったが，D区で検出した掘立柱建物群がその一部である可能性がある。掘立柱建物を構成する柱穴を含め，数基の柱穴からは弥生時代後期の土器片が出土している。だが，遺物の出土量が僅少であるため建物の時期を弥生時代後期に限定できない。これについてはD区の南側に接する部分が来年度調査区となっているため，調査の進展に期待したい。E・F区についても，調査区内で検出した東西方向の自然流路は用水路として機能していた人工のものである可能性が高い。上面の削平が著しく，検出した遺構が当時の姿を留めているとは考えにくく，おそらくこれに付随する導水路が存在し，周辺に水田が広がっていた可能性が高い。経営母体については，遺構からの遺物が極端に少ないことを考えると，集落域からある程度距離が離れた部分を調査した可能性が高い。ただし，E区とF区の境付近を中心に黄褐色粘質土の地山が盛り上がっている部分が認められ，南東の方向にこの盛り上がりが伸びることから，調査区の西側には本来，集落が広がっていた可能性が考えられる。

〈中世〉昨年度調査に引き続き，掘立柱建物・溝状遺構を検出した。掘立柱建物は昨年同様，規模の小さなものではあるが，わずかながら当該期の遺構が広がる様子が見て取れる。当時の条里型地割に平行する溝状遺構は，主としてA区・E区で検出できているが，坪界に一致するものではない。おそらく，近世の遺構として調査している坪界溝とその範囲を同じくしているためと想定できる。

〈江戸時代〉B区では条里型地割に規制された掘立柱建物群，溝，鋤溝群などを検出した。掘立柱建物群と鋤溝群は櫛列で区画されており，坪界溝によって区画された坪内をさらに区切って利用している状況が窺えた。B区以外の部分では鋤溝が目立ち，主に耕作地であったと考えられる。

報告書抄録

ふりがな	けんどうかんけいまいぞうぶんかざいはっくつちょうさがいほう
書名	県道関係埋蔵文化財発掘調査概報
副書名	
巻次	平成12年度
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	
編集機関	財団法人 香川県埋蔵文化財調査センター
所在地	〒762-0024 香川県坂出市府中町南谷5001－4 電話 0877－48－2191
発行機関名	香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
発行年月日	西暦 2001年 3月31日

総頁数	目次等	本文	表	図版	写真枚数	挿図枚数	付図枚数
50頁	5頁	45頁	1頁	0頁	18枚	35枚	0枚

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町	コード 遺跡	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
本村中遺跡	香川県三豊郡詫間町 詫間本村中	76972		34度 13分 23秒	133度 39分 50秒	20000801 ～ 20001031	1,319	県道紫雲出山線建設
西久保谷遺跡	香川県三豊郡三野町 西久保谷	37423		34度 13分 59秒	133度 42分 23秒	20000401 ～ 20000731	2,400	県道丸亀詫間豊浜線建設
川津六反地遺跡	香川県坂出市川津町 六反地	37203		34度 17分 20秒	133度 51分 21秒	20000901 ～ 20010131	1,737	国道438号 道路改良事業
川津昭和遺跡	香川県坂出市川津町 昭和	37203		34度 17分 20秒	133度 51分 21秒	20000901 ～ 20010131	1,288	国道438号 道路改良事業
上林遺跡	香川県高松市上林町	37201		34度 17分 13秒	134度 4分 39秒	20000901 ～ 20016331	7,766	県道中徳三谷高松線建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
本村中遺跡	自然流路跡	縄文時代早期	包含層	押型文土器・石器 有孔石製品	
	溝状遺構群	弥生時代後期	自然流路・溝状遺構	弥生土器・石器	
		中世～近代	溝状遺構・掘池状遺構	中世・近世土器	
西久保谷遺跡	集落跡	縄文時代	石器集中部	石核・剥片・砕片	
		古墳時代後期	竪穴住居跡	滑石製紡錘車・ガラス製小玉	
		奈良時代・中世	掘立柱建物・溝状遺構など	須恵器・土師器・製塩土器片	
川津六反地遺跡	集落跡	縄文時代	石器ブロック・サヌカイト集積遺構	石鏃・石鏃未製品・スクレイパー・石核・剥片	
		弥生時代前・後期	土坑・ピット・溝・井戸	弥生土器・石器	
川津昭和遺跡	集落跡	弥生時代後期～古墳時代前期	大型灌漑水路	弥生土器・石器・古式土師器	
		近世～近代	土坑・井戸	近世土器・陶磁器	
上林遺跡	溝状遺構群	弥生時代後期～古墳時代後期	溝状遺構・大型灌漑水路	弥生土器・石器 須恵器・土師器	
		中世～近世	溝状遺構・掘立柱建物	中世・近世土器など	

県道関係埋蔵文化財発掘調査概報

平成12年度

平成13年３月31日

編集・発行　香川県埋蔵文化財研究会
香川県坂出市府中町字南谷5001番地４
電話　(0877) 48—2191
ＦＡＸ (0877) 48—3249
印　　刷　セキ株式会社